

南京陥落と日本のマスメディア

玉井研究会

- I 序 文
- II 南京陥落をめぐる祝賀の高揚
 - 1 紙面比較
 - 2 祝賀気運の盛り上がり
 - 3 南京陥落の社会的・文化的影響
- III 南京陥落をめぐる認識と国民政府の内情
 - 1 南京陥落に対する認識
 - 2 国民政府の内情
- IV 南京陥落をめぐる対外関係
 - 1 南京陥落前後におけるイギリスの支那支援
 - 2 南京陥落前後におけるソ連の支那支援
 - 3 パネー号事件をめぐる日米関係
- V 結 語

I 序 文

昭和12年（1937年）7月7日、盧溝橋付近の河原で支那駐屯軍の歩兵第一連隊第三大隊第八中隊が夜間演習中、兵士1名が行方不明となったことをきっかけとして武力衝突が起きた。盧溝橋事件である。この偶発的に発生した一事件はその後の日支両国の対応によって拡大し、以後8年も続く支那事変へと進展していった。

昭和12年（1937年）12月13日、南京は陥落する。南京陥落は銃後の国民にも大きな影響を与えた。陥落の公式発表がなされる前から国内は陥落の祝賀に沸いて

おり、提灯行列や音楽隊の行進が行われ、紙面上には「祝 南京陥落」の文字が多く見られることになる。こうした世論も受けてか、陥落後の昭和13年（1938年）1月には「国民政府を相手とせず」のフレーズで有名な第一次近衛声明が発表される。

支那事変における「南京」についての研究は少なくないが、とりわけ南京事件を扱った研究は盛んに行われてきた。代表的なものとして、秦郁彦は当時の新聞について「森羅万象のすべてを南京陥落の慶祝に巻き込もうとする新聞のたくましい時局便乗主義」として、日本軍の蛮行を伝えることのなかったメディアを批判している¹⁾。

支那事変を対象としたメディア分析としては、戸部良一が『外交時報』と『中央公論』を用いて日本人の支那事変理解の特徴を明らかにすることを試みており、「南京陥落によって日本国内には戦勝気分が横溢した、と従来は言われてきたが、中国問題専門家を含む言論人の間では、さすがにそうした楽観論が支持されてきたわけではなかったようである」²⁾と指摘している。

また長井暁は、『東京朝日新聞』を分析し、新聞は戦況報道の速報性を重視したため疑問や批判的な視点が入り込む余地はなく、戦争の真実を伝えず、国民の戦争熱を煽ったとしている³⁾。しかし、かかる研究は南京陥落に関する報道の包括的な分析を行ったものではなく、本メディア分析に未だ研究の余地を残している。

本研究では南京陥落に関し新聞5紙及び、雑誌15誌の報道内容や広告を分析する。

Ⅱ 南京陥落をめぐる祝賀の高揚

本章では、新聞紙面上に表出した陥落前後における祝賀ムードの高揚の実際と、マスメディア上で確認できる社会的、文化的影響、歓喜の波及の実際を分析する。

1 紙面比較

本節では、メディアがどれほどの熱量で南京陥落、ひいては支那事変を報道していたかを、新聞5紙の南京攻略戦をめぐる報道手法にも注目しながら検証する。昭和12年（1937年）になると新聞社の空輸技術は大きく発展し、戦場の写真が即日掲載されることもあった⁴⁾。すなわち、速報性でラジオに後れを取る新聞も、

技術の発達により迅速な報道が可能になったわけである。ここでは、写真や見出しなど、紙面に現れた特徴を分析し、各紙の南京への関心の高さを解き明かしたい。

(1) 戦況報道の特徴と紙面比較

本項では、戦闘が最も激しくなった期間における新聞5紙の報道手法の違いを検討する。もっとも、当該期間において戦況報道は毎日更新され、その全てを考察することは難しい。そこで、南京の戦況における主要な出来事を1つ取り上げ、各紙の報道における見出しや編集の共通点について、相違点を含め考察を加える。

ここでは、日本軍の城門占領に対して、各紙がどのように報道したのか検討する。12月11日の朝刊1面(2面)⁵⁾において、各紙は日本軍が南京城の全城門を占領したことを報道した。この日は12月を通して記事数が最も多かった日であり、各紙ともに城門の占領を積極的に報道していたことがわかる。

次に、各朝刊1面(2面)の見出しを検討してみたい。各紙とも、紙面全体を活用して歓びを表現しようとしていた。中でも、『東朝』が戦況報道を1面トップに掲載していたことは注目される。『東朝』は、普段1面を広告面にしているが、この日は朝刊第1と第2の朝刊を計2度発行しており、朝刊第1では、戦況報道を1面に配していた⁶⁾。なお、以下のように、両朝刊の構成が朝刊第1の1面左下に紹介されている⁷⁾。

「朝刊第一 【第一面】南京陥落 【第二面】南京攻略戦況記事 【第三面】政治記事並びに外電記事 【第四面】経済記事 【第五面】江南戦線皇軍躍進の地図 【第六面】ラジオ 【第七面】社会記事」⁸⁾

「朝刊第二 【第二面】南京陥落特集 【第三面】南京陥落社会記事 【第四面】●●●【第六面】スポーツ記事 【第八面】朝刊小説、●●●●」^{9) 10)}

上記内容から広告面を含め、朝刊第1、第2ともに8頁で構成されている¹¹⁾。全16頁の内、朝刊第1は1面から7面まで、朝刊第2は2面、3面が南京に関連する報道で占められており、『東朝』が南京に対してどれほど関心を持っていたかが伝わる。朝刊第1は南京報道に使わなかった頁は広告面(8面)のみである。朝刊第1は通常の紙面に先立ち、号外のように全ての頁を南京の報道に特化させた紙面構成であったことがわかる。また、デザイン面においても特別な意匠が見

られる。まず、紙面の上部2段全てを使い、南京城の絵¹²⁾があしらわれている点である。絵を発注する期間を考えると、前もって準備をしていたことが推察される。更に、紙面の中央には6段抜き縦書きで「祝敵首都南京陥落」¹³⁾と見出しが大書されている。以上のように、『東朝』においては内容、デザイン共に意欲的な構成であった。

『大朝』の1面も『東朝』と似たデザインをしている。まず、『東朝』と同じ南京城の絵が紙面の上部2段にあしらわれている。紙面中央には、黒地に白抜きで「皇軍万歳! 万々歳!」(8段)と紹介されており、この二点においては『東朝』と似て豪華なデザインとなっている。トップの「膺懲の師、南京を陥れ 武威赫々、全支を圧す 今弘暁から残敵大掃討」は7段抜きの縦書きで見出しが大書されている。記事内に「日の丸」があしらわれている点においても目を引く構成となっている。また、1面の左下で前日に発行した第2夕刊について説明されている。「南京陥落の報に接するや本社は十日夕直ちに最前線特派員の報道並びに銃後国民の歓喜などを満載せる四ページの第二夕刊を発行いたしました」¹⁴⁾とあり、第2夕刊が臨時に発行されたことが窺える。12月10日夕刊も、1面が陥落報道、2、3面が祝贺模様の報道、4面が広告面であり、南京陥落にフォーカスした記事であった。特に、広告面は紙面上1段に横書きで「祝南京陥落」と黒字で見出しを打ち、その背景には青海波で模様をつけていた。広告面のような、報道と関係ない紙面にまで陥落をアピールしていたことは、『大朝』が南京陥落をめぐる歓喜を盛り上げていたことが窺われる。

『東日』『大毎』『読売』の3紙における意匠も『東朝』『大朝』ほどではないが、南京入城を大きく取り上げていた。『東日』のトップの見出しは、紙面上部に横書きで「皇軍勇躍南京へ入城」(1段)、「敵首都城頭に歴史的日章旗 各城門を確保・残敵掃討 猛烈なる市街戦を展開」と8段抜きの縦書き見出しを付け報道している。『大毎』の紙面はである。トップに「南京入城」(2段)と横書きで見出しを付け、背景に桜の花びらの模様を散りばめている。「薄暮、各城門を占領 死物狂いの残敵掃蕩 燦然・感激の日章旗!」(7段)と縦書きで見出しを付けている点も目を引く。『読売』は、紙面最上部に、黒地に白抜きで「南京城燦たり日章旗」(1段)と、横書きで見出しをつけている。その下には、「感激の十日、首都を占領 光華門、脇坂部隊誉れの一番乗り 全線一斉に突入市街戦展開」(8段)と、縦書きで報道している。3紙ともに、横書きの見出し+縦書きの小見出しをつけてトップ記事が構成されている。いずれも、一番目立つ場所で、大きく

城門の占領を取り上げてはいるものの『東朝』『大朝』に見られる大書による見出しはない。

このように、城門の占領には各紙ともに高い関心を示して報道していたが、『東朝』『大朝』が他3紙と比べ大きく扱い、センセーショナルに報道していたことがわかる。

最後に、紙面に掲載された写真を比較してみたい。『東朝』『東日』『読売』の3紙は南京城の写真を掲載していた。特に、『東朝』¹⁵⁾『東日』¹⁶⁾の2紙は同じ写真を使用している点において特徴的である。『東朝』は2段抜き、『東日』は3段抜きの掲載で、いずれも紙幅を大きく取っている。『読売』の写真はの通りで、3段抜きで掲載している¹⁷⁾。また、『東日』『大毎』『読売』は、日本軍軍人の顔写真を掲載していた。顔写真においても、『東日』と『読売』に同一写真の使用が見られる点は興味深い。『東日』は殊勲者として表彰された脇坂部隊長の顔写真を、円形にトリミングして掲載していた¹⁸⁾。ただ、その大きさは1段の半分ほどしかなく、『読売』と比べると、小さい扱いと言わざるを得ない。『読売』も脇坂を被写体とした、同一の写真を掲載している¹⁹⁾。写真のトリミングは縦長の長方形で、2段抜きである点が『東日』との相違点である。また、この写真は1面トップに用いられている。『大毎』は他2紙と異なり、松井石根軍最高指揮官の顔写真を掲載している²⁰⁾。写真はトップ記事に用いられており、2段抜きで円形にトリミングされている。

以上、4紙における写真について概観した。掲載されていたものは南京城と軍人の写真の2種類である。特に、『大毎』『読売』がトップ記事に軍人の写真を用いたことは興味深い。上記2紙は、占領を伝える写真の活用において、他紙と違う狙いを持っていたことがわかる。

また、掲載された地図に目を向けると『東朝』『東日』『大毎』『読売』の4紙はいずれも南京城内の記事を掲載している。もっとも、大きさや内容も含めてほとんど変わりはなく、地図による比較は難しい。写真も合わせ視覚的な説明をしようとする試みが見られる。因みに、『大毎』は朝刊内に不定期で事変画報というコーナーを設置していた点が注目値する。本コーナーは1頁全てを使って南京の写真を数枚掲載するものである。11日においても事変画報は掲載されており、視覚的な説明に力を入れている傍証となる。

2 祝賀気運の盛り上がり

本節では南京陥落によって人々や街にもたらされた祝賀気運の盛り上がりについて、新聞各紙と雑誌の報道から分析を行う。

(1) 日本国内における祝賀

日本軍の活躍によってもたらされた南京陥落の一報で日本国内は大きな盛り上がりを見せることになる。本項では日本国内において南京陥落が祝われた様子を明らかにする。

分析の中心は南京陥落後の祝福ムードについてであるが、実際には南京陥落前の12月7日頃から南京陥落を見越した前祝いの催しや祝賀の準備がされており、その様子は新聞5紙すべてで掲載されている。例えば目前に迫った南京の陥落に向け12日の『東朝』では「陥落公表を待ちかねて祝勝の“準備”をした」として、陥落発表前にもかかわらず国会議事堂が電飾で飾られた様子が写真付きで掲載されている²¹⁾。

後述するように日本国内は陥落前から祝福ムードが始まり、その様子は新聞でも盛んに取り上げられたことで、陥落に向け国民の盛り上がりは大きくなっていった。こうして陥落前の祝賀気運の過熱は当局が規制をかけるほどであり、この点についても後述する。

南京陥落の一報を受け、陥落を祝う催しが公的機関の主導によって日本各地で開催された。東京市では、陥落の報が11日午前が届いた場合には即日、午後の場合には翌日に祝賀大行進を行う予定が『東朝』で伝えられている²²⁾。東京市ではかねてから南京陥落の瞬間に向けて準備を進めていることから、公的機関もが陥落を捉えて祝賀気運を盛り上げようとしていたことが窺える。『東朝』では「各地歓喜に満つ」と題して、東日本地域の祝賀ムードが報じられている²³⁾。『大朝』でも同様に「歴史的な大捷」と題し、南京陥落の瞬間を待ちわびる街の様子が紹介されている²⁴⁾。調査の対象とした5紙では東京市・大阪市周辺地域における祝賀の様子を中心に伝えられているが、これらの記事を踏まえると南京陥落は都市部に限らず全国各地でも行政主導による祝賀の催しが開かれていたことがわかる。

次に祝賀の催しの参加者について注目してみたい。まず、動員された学童が祝賀の催しへ参加したことに言及する記事は多く、新聞5紙すべてで複数の記事が掲載されている。学童に対しては授業の代替として動員がなされたが、大学生が

自主的に催しへと参加する様子も紹介された。例えば『読売』は「帝大生の祝勝行進」と題し、東京帝大が祝勝行進を行う様子を報じている²⁵⁾。記事内で誰の意見か明記されていないが、「帝大はやはり帝大らしく」という意見に従い、プラスバンドの演奏による華々しい行進の予定は中止され、「ただ黒一色の制服姿の学生群が列を正し肅々と行進して却って厳粛な祝勝気分」で行われた。また『大朝』では社説にて、この東京帝大の祝勝行進について自由参加であったにもかかわらず学生が多く参加する一方、教授が不参加であったことが難じられている²⁶⁾。南京陥落を自主的に祝う学生に対して、官立大学で莫大な国費が投下されているにもかかわらず、国家の最前線に立つ気構えがない教授に対する批判の意見が述べられていた。

祝賀行事は企業や団体が祝賀行事の主催でも行われた。『大毎』では日本軍南京城突入の10日夜、日本シール株式会社が祝賀提灯行列を行う様子を写真と共に紹介している²⁷⁾。同じく『大毎』では「商都再び灯の海」と題して、日本簡易火災社員や逓信局局員が参加した提灯行列で大阪の街が盛り上がる様子を写真と共に報じている²⁸⁾。また「押すな押すなの計画」と題し、多くの団体が旗行列・提灯行列を計画していることが、団体名も明記されたうえで『大朝』にて伝えられていた²⁹⁾。このように企業や団体が主催した祝賀の催しを伝える記事が散見されたが、調査の対象とした新聞5紙では新聞社主導のものを除くと『大毎』『大朝』が主に掲載していた。因みに、『大朝』では祝賀に参加した、または計画している企業・団体の名前がすべて細かく明記されている。大阪では企業が主催となって行われる祝賀の催しが企業・団体名と併せて新聞に載ることで、宣伝になっていたと考えられる。

新聞社も祝賀の催しを協賛しており、『東朝』では朝日新聞と全関東吹奏連盟、大日本飛行少年団が共同主催となって大規模な音楽大行進及び南京陥落祝賀大飛行が開かれた様子を伝えている。写真も一緒に掲載され、多くの人々が音楽大行進に参加している様子を見ることができる³⁰⁾。また、『東日』では毎日新聞社でも南京陥落の祝賀会を主催した様子が取り上げられている。日比谷公会堂で行われたこの祝賀会では、歓喜に満ちた会衆の殺到で場内は超満員となり、盛り上がりを見せたことが報じられている³¹⁾。このような事前に計画された催し以外にも、皇軍の南京城進入を伝える号外を出したことで、本社前に人々が押し寄せる様子が『大朝』で取り上げられている³²⁾。

次に、南京陥落を受け、大きく変化していった街の様子を報じた記事を紹介す

る。12月には例年通りであればクリスマスや年末年始に向けたクリスマスツリーや門松などで街の装飾がされる予定であった。しかし南京陥落を迎えた昭和12年12月には、南京陥落が第一に考えられ、アドバルーンや懸垂幕によって陥落を祝う装飾がなされることになる。『大朝』12月7日の記事では、南京陥落前でありながらも「国民的歓喜によってクリスマスも歳末売出しもその飾りはたちまち南京陥落祝捷デコレーションに塗かえられ、南海高島屋では6日夜には最も早く戦捷電飾を始めた様子が伝えられている³³⁾。同じく『大朝』では南京陥落後の南海高島屋の懸垂幕と共に、梅田北野劇場にて演者と観客が万歳をして南京陥落を祝う様子の写真も掲載されている³⁴⁾。大阪のデパートでは積極的に南京陥落を祝福するアドバルーンや懸垂幕の装飾が施されていたが、同様の装飾が東京府市でもなされている。単に南京陥落を祝う装飾のみならず、東京府市では銃後に対して気を引き締めるよう呼びかけも行われていた。

(2) 支那における祝賀

前項では日本国内における南京陥落を祝う様子を取り上げたが、北京や上海など支那の一部地域でも同様に南京陥落を祝う催しが行われていたことを紹介している。本項では日本人だけでなく、支那人をも巻き込んで南京陥落が祝われる様子を新聞5紙と雑誌記事から見ていく。

まず邦人街で南京陥落が祝われたことは5紙すべてに掲載されており、『東日』『大毎』『読売』では上海の邦人区にて南京陥落によって盛り上がる様子が報じられた。居留民は大旗行列を行い、目を真っ赤にしなが、皇軍の苦勞に感謝し南京陥落を祝福した³⁵⁾。邦人街の様子としては、「祝首都南京陥落」の大文字が祝勝門に掲げられ、「南京陥落」のアドバルーンが空高く浮かび上がる様子が伝えられた。

一方で、邦人街だけでなく現地の支那人も祝福していることを伝える記事も散見される。『大毎』では愛国少年軍の手記を編集した記事の中で、「南京陥落が伝えられるや北京の支那人は大喜びで日の丸をうち振りつつお祝いするありさま、また『祝陥落』やその他おめでたいポスターが掲げられ」と、南京陥落を祝福する支那人の様子が紹介されている³⁶⁾。この愛国少年軍とは、戦線に近いところで働き、国のために尽くしたいと北京府右街の軍官給仕に採用された日本人の青年たちであると同記事内で説明されている。もっとも、南京陥落を支那人が祝った様子が直接窺える記事は、この『大毎』の記事のみであり、他の記事では日本

人が南京陥落を祝う一方、支那人については南京陥落ではなく新政府の樹立や新年を祝う様子を報じている。

このように、当時の新聞では支那人が祝福する新政府の樹立や新年の祝賀イベントと南京陥落が合わせて報道されていたが、実際に支那人が日本人同様に南京陥落を祝う様子を伝える記事はほとんど見られなかった。愛国少年軍の体験談についての記事内にて支那人が南京陥落を祝福していた様子が語られているが、少年が手記に書いたものであり、間接的なものに止まっていた。

3 南京陥落の社会的・文化的影響

本節では、祝南京陥落と盛り上がりを見せた支那事変が与えた社会的・文化的影響について、経済・商業、文化への波及の2つの観点から検証する。

(1) 経済

12月13日に日本軍によって南京が陥落させられると、その時期を予測していた人々により、株式市場は大きく動いた。12月2日の『東日』では、支那事変の影響で低迷しつつあった株相場が、南京陥落を見越し、同年4月以来の高値で買い人気急騰している様子について紹介されている³⁷⁾。また、12月7日の『東朝』では、「株式一斉に暴騰 南京陥落切迫を反映」の見出しで、各銘柄の株価の表を掲載しており³⁸⁾、同日『大毎』では「南京攻略があまりにも早いので、クリスマス前後と見ていた株式市場の連中があわてて買い出し」と報じている³⁹⁾。支那事変が始まって以来株相場への注目度は下がっていたが、人々は南京陥落を見込んで株価の変動に備えて動き始めていたのである。一方で、このような南京陥落を見込んだ動きは日本銀行をはじめとする金融機関や政府にも現れている。『大朝』では、戦局の大勢楽観とともに日銀・興銀などは金融緩和工作に努め、すでに長期貸出にも手を出し始めている状態であることを紹介している⁴⁰⁾。更に、政府は年末の金融対策として南京陥落を見越し、18億円超える発行高で兌換券を大量に出している⁴¹⁾。これに対し、7日『大朝』は、年末の金融楽観とともに兌換券の増発で人々の買気が高潮になっていると伝えていた⁴²⁾。金融機関及び政府も南京陥落を見越して、株相場の変動を促進する活動をしていたことがわかる。

実際は南京陥落の前に新東株・鐘紡株・平和株の高騰が相次いだ。このような市場全体の活況に対し、早くも1日には『大朝』が高騰の原因を①イタリアの満州国承認、日本のスペイン新政権の承認に見られるような防共陣営の強化に伴う

日本の国際的地位向上、②日本軍の南京包囲態勢の完成、③対英問題を除く国際関係の漸次解消によるものと分析していた⁴³⁾。

特に新東株の高騰については、同記事で「新東の意気は南京を呑むの概がありすでにその前奏曲となっているがいよいよ南京の陥落によって利喰を呼ぶ順序であるから一本調子の急騰は望まれない⁴⁴⁾」として、当初慎重な見方を出すほどであった。確かにその後、株価は安値になって一時落ち着きを見せており⁴⁵⁾、利喰いを警戒している様子が窺える。

鐘紡株の高騰に関しては、上海南京路事件で日本軍の要求を承認させ、邦人経営の上海紡績工場が安全確実になったこと⁴⁶⁾、平和株の高騰に関しては、南京陥落の予測に伴う来たる産業景気への待望と駐支ドイツ大使の和平調停説の影響があったなどの分析がなされている⁴⁷⁾。7日には新東株が9年以來の新高値を記録しており⁴⁸⁾、南京陥落直前の相場は活況を呈していたといえよう。

しかし、南京陥落を迎えた12月13日、株価は急激に暴落する。その様子に対して同日の『東日』は、南京陥落相場は一巡して反動安になり、売り方ももう恐ろしいものがない勢いで買ったたきを開始したと報じている⁴⁹⁾。

『読売』では、「特集月曜経済 株高はまだ続くのか？」という特集が生まれ、銀行・保険・証券・汽船・日産などの複数の組織に務める上層部による経済動向の分析と今後の予測がまとめて掲載されている⁵⁰⁾。ただし、この特集は、事前の取材を必要とする性質上、南京陥落に伴う株価暴落を受ける前のものであることが明らかである。したがって、この特集からは人々の株高への関心や注目は頂点を迎えていたことがわかるが、皮肉にもその記事が掲載された日に株価が暴落したのであった。

このような暴落の要因として、主に2点が挙げられている。第1に、上記の通り、早い時期から南京陥落を見込んだ株の売買が行われていた影響である。『東朝』は、陥落の1週間前から陥落を見越して上がった相場が出てしまっていたからと分析し、浮かれ買いはしないようにすべきと注意を促している⁵¹⁾。また、『大毎』は、結城日銀総裁の警告の影響について言及している。結城日銀総裁の警告とは、結城が株式市場の熱狂買いに対して警戒的な発言をしていたことを指し、この影響で投機抑制を連想させたという⁵²⁾。第2に、南京陥落時に起きた事件をめぐる対外関係への不安である。『大毎』は、熱狂人氣が冷却され反動以上の落ち込みとなったのは、南京攻略相場が後述するパネー号事件などにより不安材料になった影響だと分析している⁵³⁾。

以上のように、支那事変勃発以降、停滞気味であった株式市場は南京陥落の実現可能性が国民に意識されるようになることで活性化した。また、日銀をはじめとする金融や政府によって、年末に向けて緩和政策の実施及び金融楽観兌換券の増刷が行われており、国内で株の購買意欲を高めるような施策が打たれていた。この中で人々は、南京陥落への期待、上海南京路事件・パネー号事件への憂慮、株価高騰による利食いの懸念を主な判断軸として、積極的な株の売買を行っていた。しかし、13日の南京陥落の直前をピークに株価は大暴落した。この原因について新聞各社は、南京陥落を見越した相場が過熱気味であったことと、パネー号事件などにより対外関係を不安視する傾向が一時的に高まったためだと分析していた。南京陥落前の早い時期からの期待とそれに伴う過熱により株価は一時高騰したものの、利食いへの警戒やパネー号事件などの不安材料が生じ反落したと考えられていたのである。

南京陥落以後、株価は一時暴落したものの、その後の戦局への予測に基づいて株の売買は積極的に行われた。南京陥落直前ほどの盛り上がりはなくとも、ある程度の株価の変動は続いていた。このように、南京入城式などを通して南京陥落の歓喜が再興する様子は、比較的冷静な判断が必要な株式相場にも表れるほど、人々に熱狂と興奮を与えていたといえるであろう。

(2) 南京陥落の奉祝広告

支那事変が勃発してから、戦勝を意識させて購入を促進する様々な広告が見られるようになった。文字で戦勝を掲げるものや支那事変を彷彿とさせる爆撃の様子を背景とするものなど、その広告の種類は多様である。また、12月8日以降、南京陥落に即した広告デザインや祝勝記念広告も多く掲載された。日本軍が正式に南京を陥落させたのは13日のことだったため、陥落を見越した奉祝広告の事前準備が行われていたことを窺わせていた。南京陥落の祝勝ムードを生み出す広告として、例えば、食品、展示会、百貨店、映画、不動産、電車などの広告が挙げられる。ここでは以下、南京陥落を彷彿とさせる特徴的な広告を中心に、食品関係(薬品・日用品も含む)、レコード、書籍、ラジオ(番組広告も含む)と分類して紹介したい。また、南京陥落に際して掲載された特徴的な広告紙面についても言及したい。

まず、酒類に関しては、南京陥落と酒を「祝杯」のイメージに紐づけているものが多かった。例えば、清酒月桂冠の「万歳万歳! この日こそ 待望の日/皇

軍蔣士の「労苦を勞い／心から励む 祝勝杯」⁵⁴⁾、寶ウイスキーの「戦勝気分いよいよ高潮 祝え『寶』で!」⁵⁵⁾、清酒松竹梅の「戦勝の初春を祝讃えん 芳醇の盃も高く」⁵⁶⁾などと書かれた広告が挙げられる。大関の「酒の司大関 南京陥落 乾杯!乾杯!」では、南京陥落を終えた兵士らしき人物が盃を片手に祝う絵も描かれている⁵⁷⁾。

また、南京陥落に際して戦地の兵隊に物資を送る慰問袋と関連させた広告も多く掲載されていた。例えば、森永ミルクキャラメルの広告には「南京陥落皇軍万歳 兵隊さんありがとう!戦地はこれからますます寒くなります。兵隊さん達に美味しいキャラメルを送ってあげましょう」⁵⁸⁾との言葉が添えられている。キャラメルの箱に兵士に送る用の氏名欄があることも記載されている⁵⁹⁾。加えて、グリコの広告は「銃後の感謝に 何よりグリコ」⁶⁰⁾と大書しながら、3名の兵士が慰問袋から商品が出てきて手を挙げて笑顔で喜ぶ様子を絵で大きく描いていた。

一方で、南京に対して侮蔑的な意味をやや含ませて商品を宣伝する広告も存在した。例えば、美顔水の商品の「蚕蚊南京虫その他毒虫でカユイ時にもとても便利な薬」⁶¹⁾や「仁丹で病魔も陥落」⁶²⁾が挙げられる。前者に見える「南京虫」の「南京」の意味は地理的な南京を示すのではなく、当時から慣習的に呼ばれていた害虫の通称である。「祝南京陥落」と題し新聞1面全体を奉祝広告で覆っている中の1つの広告であるため、その退治したい相手として「南京」に地理的な意味を含ませていた。後者については、当時「陥落」の文字の前には「南京」が来るのが一般的であったため、敵である南京を「病魔」に重ね合わせていたことがわかる。

レコード関係については、南京陥落に際し戦勝にちなんだ歌を収録していることを宣伝する広告が多かった。例えば、ビクターレコードは「南京陥落大勝利」と大書し「我等は互いに手を握り、口を揃えてこの戦勝譜を歌おう!」と書いた広告⁶³⁾や、キングレコードは「叫べ万歳」と大書し「讃えよ!皇軍の武威/今こそ叫べこの歓喜! / 天地も裂けよ戦勝の歌」と付された広告⁶⁴⁾などを出していた。他にも、リーガルレコードの「戦勝を寿ぐ 正月全勝譜」⁶⁵⁾など正月と祝勝を関連させた歌について宣伝する広告や、日の丸提灯を背景として「凱旋音頭」と大書し、「国を挙げての喜びを、この唄で!!」⁶⁶⁾との言葉を付して南京陥落を祝勝する歌を収録していることを示唆するテイクレコードの広告もあった。総じて、レコードの広告も南京陥落の祝福ムードに乗じていた様子がわかる。

支那事変を契機として、一層普及することになったラジオ関係の広告も見ることができ、南京陥落を関連させたラジオ製品の広告やラジオ放送の番組広告が掲載されていた。ラジオ製品の広告では、七欧無線が「祝戦勝 ナナオラ」と大書され、「ラジオの使命はこれからです」と追記していた⁶⁷⁾。ラジオ放送の番組広告では、南京陥落を祝う歌や、南京陥落に関する報道及び軍事美談が取り上げられていた。南京陥落を祝う歌としては、「銃後歓喜の中に送る感激の豪華番組 南京陥落祝賀放送」と題する特集で、南京陥落にちなんだ謡曲・歌謡曲・長唄・合唱などが紹介されている⁶⁸⁾様子から読み取れる。また、「傷病将士を慰問 特輯番組」でも俚謡連曲や歌謡曲などが歌われることが紹介されている⁶⁹⁾。他にも、次の項で詳述するが、「南京にあがる凱歌」が南京陥落に際して作られた国民歌謡曲として放送される⁷⁰⁾など、南京陥落の時期において歌とラジオの関係性は強く、その興隆を看取できる。

一方、南京陥落に関する報道では、東京放送で外務政務次官松本忠雄による「南京陥落とその後に来るもの」と題する時事解説が流されていた⁷¹⁾。ちなみに、新聞記事であるが「ラジオも勝鬨 市の職員七千人や銀行鯛 大都縫う灯の流れ」と題し、大阪の祝賀大会・提灯行列とともにラジオ放送が盛り上がる様子も伝えられていた⁷²⁾。軍事美談を伝える放送では、南京攻略軍の先頭を切って城内に殺到した勇士らが名誉の戦傷を負って陸軍病院に静養して白衣姿であったが、南京陥落の快報に病床に起き上がり、一斉に万歳を叫んだという話が紹介されていた⁷³⁾。また、「子どもの時間 ラジオ訪問」の中では、「可愛い慰問」と題して、子どもたちが東京第一陸軍病院で音楽を奏でて慰問する話を紹介しており、南京陥落を通して兵隊への慰問を子どもたちへ促進している様子が読み取れる⁷⁴⁾。このように、ラジオも南京陥落を祝う内容を取り上げており、祝勝ムードを促進する一面を担っていたことがわかる。

最後に本章第1節でも言及した、南京陥落を祝った特徴的な広告紙面についての詳細を紹介したい。それは、南京陥落を彷彿させるデザインが施された、広告と奉祝広告のみで新聞1面を埋め尽くした紙面である。前者については、「日本の旗が掲げられた城」や「提灯」が代表される。「日本の旗が掲げられた城」は南京城を示唆しているのは明らかである。「提灯」は、多くの広告で用いられており、これは前節で詳しく扱った南京陥落を祝う「提灯行列」と重ね合わせることができる。他にも福助足袋の広告では、提灯のデザインと「征服」の文字だけで南京陥落を示唆しており⁷⁵⁾、当時の人々にとって「提灯」は南京陥落を祝う象

微的なものであったことがわかる。後者については、「祝南京陥落」などと題されて新聞1面につき4つの広告が敷き詰められたものが多かった。4つの広告が敷き詰められた新聞1面はいずれも南京陥落をテーマとしたデザインになっており、新聞の1面を華やかに飾っていた。新聞社主体でつくられたであろうこの紙面からは、祝賀の雰囲気づくりを扇動している様子が読み取れる。

以上のように、多くの企業が南京陥落と自社の商品を関連づけて広告を出しており、南京陥落という戦時動向に商業的価値を大きく見出す側面を確認できた。南京陥落の祝福ムードに乗り、自社の商品の広告宣伝を通してよりそれを盛り上げていくことで、商業活動及び消費活動に影響を与えようとしていたといえる。こうした祝賀気運は、新聞が販促を兼ね関連広告を積極的に企画し掲載することを通じて巻き上げられていた。

(3) 文化への波及

(a) 漫画

支那事変にて日本が進軍していく中で、新聞及び雑誌の連載漫画も戦争の色を帯びていった。全体の傾向としては、雑誌と新聞の両方において漫画のテーマは銃後の人々や支那及び日本の兵隊に焦点を当てたものが多かった。一方、雑誌には南京陥落を直接的に反映した漫画は少なく、12月の新聞には南京陥落に関連する内容が多く見受けられた。これは、新聞の即時性を反映した所以であろう。ここでは、銃後の人々の生活、支那及び日本の兵隊、南京陥落に関する漫画を順に紹介したい。

まず、銃後の人々の生活に関する漫画について、戦争と関係づけているが自由なコメディの内容を見出すことができた。例えば、『キング』の「ター坊の慰問袋」には、慰問袋に入れるためにあげたお菓子を配ってしまう子どもの様子を4コマ漫画で描いている⁷⁶⁾。

次に、支那及び日本の兵隊に関しては、支那兵の無能さを表現する内容が複数あった。例えば、『少女倶楽部』では、支那の兵士が爆弾を仕掛けるがそれが転がって自滅する様子⁷⁷⁾や、日本の旗を持つ支那兵が応援を呼びに行こうとするが同様に日本の旗を持つ支那兵に遭いびっくりして逃げる様子⁷⁸⁾が描かれていた。また、『キング』では、退屈そうな支那兵の顔に「ハッハッハ、負けるのは当たり前でしょう」とコメントが付されていた⁷⁹⁾。

最後に、南京陥落に関する漫画を見ていきたい。新聞各社の連載漫画である

『東朝』の「末ッ子ゴロチャン」、『大朝』の「鉄兜のテツちゃん」、『東日』の「半ちゃん豆日記」に共通して、12月13日の南京陥落以前から南京陥落を見込んだ描写があり、陥落に関連する内容が多く描かれていた。例えば、南京が落ちるからお祭りのようだと言っている様子⁸⁰⁾、南京陥落を祝って床屋で「南京陥落刈り」とオーダーする客の様子⁸¹⁾、提灯行列で残った提灯を活用する様子⁸²⁾、陥落祝の料理に使う大根が蒋介石が泣いてる顔が描かれている様子⁸³⁾などが挙げられる。

(b) 詩歌・短歌

南京陥落を祝って多様な詩歌や短歌が新聞・雑誌に掲載されていた。詩については、新聞5社に共通して南京陥落を祝う詩が掲載されていた。その中には、中河幹子の「南京陥落」⁸⁴⁾、佐々木信綱の「南京陥落す」⁸⁵⁾、入江來布の「祝敵首都陥落」⁸⁶⁾、萩原朔太郎の「南京陥落の日に」⁸⁷⁾、室積徂春の「祝南京陥落」⁸⁸⁾、西條八十の「南京の日の丸」⁸⁹⁾などの詩があり、当時の著名な詩人による詩を載せていたことがわかる。その内の1つ、土井晩翠の「南京陥落」⁹⁰⁾の詩を紹介する。

- (一) 東亜の史上 二千年、／長きに亘り、いくたびか、／治乱興敗重ね来し／／揚子江上 南京府、／四百徐州の大首都は／けふ皇軍の手に落ちぬ。
- (二) 建業、金陵、秣陵の／名を揆へ来り、連想を潮と湧かす名都城、／／「南朝四百八十寺……」／詩人の筆にかんばしき／大都是遂に陥りぬ。
- (三) 人工及び天然の／守りゆゆしく誇り来し／「難攻不落」南京府／／固きも遂に陥りぬ、／勇武世界に比類なき／皇軍の手に／一朝に。
- (四) ああ南京は陥りぬ、

(土井晩翠「南京陥落」)

このように南京の歴史と戦いに思いをはせながら、陥落の喜びを噛みしめる様子を読み取ることができる。

歌については、替え歌や国民歌謡曲など多様なものがあつた。替え歌には、1番から10番まで戦局に合わせた歌である「支那事変替え歌」の中で、「南京取られてどこへゆく、冥土へ参ろうか乞食しよか」と書かれていたり⁹¹⁾、支那兵や工兵の様子を唄った「滑稽替え歌」⁹²⁾があつたりした。また、国民歌謡曲には、南京陥落を祝う「凱歌」としてJOBK 文藝課作詞・山田耕作作曲の「南京にあがる凱歌」⁹³⁾が、内田栄一の歌唱によってラジオで披露されたことが『東朝』『大朝』

『東日』の3社の紙面で紹介されていた。ラジオというメディアを用いて、歌を通じた祝勝の盛り上げが図られていたことがわかる。他にも、実際の戦場を意識させる「南京爆撃の歌」⁹⁴⁾や、「南京爆撃大手柄」と歌詞に載せてそれを讃える「軍国大漁節」⁹⁵⁾なども作られていた。

短歌については、読者から募った短歌を講評する企画があった。そこで1等を受賞したものは「南京の城壁高く日章旗掲ぐるまでは生きよ弟」という短歌で、これに対し『生きよ弟』に「何と悲愴な叫びではなからうか」といった講評が付けられている⁹⁶⁾。これらから、人々の生活に大きく南京陥落が希望や喜びを与えており、それが詩歌や短歌を通して表出している様子を読み取れるだろう。

以上から、南京陥落を果たした日本軍を称え喜びを分かち合う手段の1つとして、詩歌や短歌が国民の中で培われ、興隆していた状況を読み取ることができる。

本章では、南京陥落に関してマスメディア上に祝賀ムードと共に現れた社会的、文化的影響を分析し、南京陥落時の新聞、雑誌の特徴を明らかにした。

第1節では新聞紙面に見られる特徴について検討した。南京における戦闘が本格化すると、記事数は急激に増加した。調査期間全体を通して、記事数が最も多いのは戦闘が行われた時期である。この時期は、各紙に様々な工夫が見られたことも指摘できる。例えば、『東朝』12月11日朝刊の2部構成がこれに該当する。当該朝刊においては、朝刊第1、朝刊第2と、2度にわたって発行された。特に、朝刊第1は広告面を除き全ての頁が南京の報道に関連しており、新聞社が南京報道に懸ける熱量の高さが窺える。このように、戦況報道が増加した時期には紙面に様々な特徴が見られ、写真や地図を活用するなど、視覚的情報を増やす工夫も見られた。それらは、調査した5紙すべてに見出すことができ、各紙の南京攻略戦に対する関心が高かったことを示していた。

第2節では、南京陥落で盛り上がる人々や町の様子の記事に着目した。実際には南京陥落の前から陥落を見越して人々は祝賀の催しを開いており、警視庁や軍部は国民の盛り上がりが過熱することを懸念したためか、その制限を行っていた。南京陥落が正式に報じられると全国各地で旗行列や提灯行列が開催され、国内は祝福ムードに染まった。また、日本だけでなく中国の邦人街でも同様に南京陥落が祝われた様子を見ることできた。

第3節では、経済・広告及び文化に関わる記事から、南京陥落が与えた社会的・文化的影響について着目した。株価の変動については、南京陥落を迎える前から

陥落を見越した祝福ムードで株価を押し上げていた様子を見ることができた。その高揚は、南京陥落の当日に株価の反動安に導くほどであった。また、広告紙面も陥落前から陥落を見越した奉祝広告が見られ、その後、祝南京陥落の一言になっていた。漫画、詩歌・短歌でも南京陥落を祝う内容が多く、祝賀の気運が国民の各層にまで普及していたことがわかる。

以上、新聞報道、広告、雑誌を通じて、支那事変での戦局の推移から南京陥落を早い時期から見込み、それが社会経済を介して国民意識の中に浸透し、陥落祝福の気運が多くの国民を巻き込んで盛り上がっていたことがメディア報道を通じて確認することができた。また、関連報道や記事、さらには奉祝広告の掲載を通じて、メディア自体がかかる気運高揚を主導していたことを明らかにすることができた。

Ⅲ 南京陥落をめぐる認識と国民政府の内情

前章では、南京陥落の日本の祝福の盛り上がりや、かかる祝賀気運の文化を含めた国民各層への波及した実際について検討した。本章では、「南京」に関する新聞報道や雑誌記事の特徴を概観する。陥落することになる「南京」に関する報道がいつ頃から盛り上がり始め、戦局の変化に伴い「南京」に関する報道がどのように変化したのか、さらに、国民政府内の派閥の対立構造が、日本国内においてどのように注目されたのかを明らかにしたい。

1 南京陥落に対する認識

本節では、南京に関する報道がいつ頃から始まり、また、南京が日本国民にどのように認識されるようになったのか、さらに、南京陥落という事実が日本国民にどのように受け止められたのかを明らかにする。

その際、南京陥落前と南京陥落後の2つの時期に分け、それぞれの期間における報道の特徴について紹介したい。第1項では、昭和12年（1937年）8月15日から12月13日までの約4カ月間を扱う。当該期間では、南京空爆の開始により南京への言及が行われるようになり、空襲が激化し陥落が迫るに従い、報道の盛り上がりが見られる。第2項では、昭和12年（1937年）12月14日から昭和13年（1938年）1月31日までの約1カ月間を扱う。当該期間は、南京陥落の影響で、支那事変の今後の展開を予想する議論の盛り上がりが見られる。

(1) 陥落前の南京に対する認識 (昭和12年〈1937年〉8月15日～12月13日)

(a) 支那首都南京の認識

はじめに、支那事変に際して、南京がどのように日本で報じられ、いかなる認識がなされていったのかを検討する。まず、日本軍による南京への攻撃を日本人が認識し始めるのは、南京空襲が始まった時期であろう。空襲は昭和12年(1937年)8月15日に行われ、同日、それが報じられた。『東朝』は、8面構成で発行した号外の8面において、「我海軍機長驅南京へ空軍根據地を爆撃す敵に甚大な被害を與ふ」⁹⁷⁾と、支那の重要拠点である南京への空爆を大きく伝えた。日本人が南京を支那の重要拠点と認識し始めるのはこの時期からだと考えられる。その後、約1週間は、南京に対する空襲を報じる記事が多く見られ、日本のマスメディアの南京への関心が高まっていたことが読み取れる。また、同年9月19日の南京空襲を契機に、その後1週間ほど盛り上がりを見せた。これらの記事の特徴として、空襲による戦果や、南京市内の様子を伝える報道が多く見られた。

その一方で、国民政府に関する報道も見られるようになる。例えば、『東朝』は、日本軍の進軍と爆撃を受けて、国民政府が9月2日を期して重慶に遷都を行う準備を進めていると報道した⁹⁸⁾。その他、南京の様子を伝える報道としては、空襲による街の破壊や人口減少に関する記事が多く見られた⁹⁹⁾。このように、南京空襲が始まって約1カ月の間は、南京空襲の戦果を伝える報道のほかに、南京市内の様子や南京の今後を予測する論説などが掲載されたのである。本項ではとりわけ、南京が日本国内に対してどのように認識され、どのような印象を持たれていたかを明らかにする。

まず、南京空襲に伴い、国民に認識され始めた南京は、新聞各紙において大きく2種類の取り上げられ方にまとめることができる。第1に、支那の軍事的な重要地点としての南京である。先に挙げた8月15日の記事では、南京が支那空軍の重要根拠地であると指摘されている。例えば、『大朝』の天声人語では、上海陥落は第一段階に過ぎず、蒋介石の迷夢が覚めないのであれば南京の攻略は致し方ないと述べられているのはその典型である¹⁰⁰⁾。このように、支那事変において、南京は軍事的に重要な拠点であり、上海攻略後の次の攻撃目標として報道されたのである。

第2に、死のイメージとしての南京である。これは、日本軍の南京空襲によって、静まり返った南京の様子を通じて伝えられた。例えば、『東日』は、南京空襲後の南京の様子をまさに「死の都」と表現している¹⁰¹⁾。この記事の他

にも、空襲による軍事施設の破壊や人口減少などにより、南京を「死」という言葉を用いて報道する記事が多く見られた。

以上のように、南京は空襲が始まると同時に注目されることになり、国民の前に浮かび上がることになる。その際、国民が認識できるように地図を使って南京の位置を示すことに加えて、南京が支那空軍の重要根拠地であることが示された。また、日本軍の空襲によって南京市内の人口が減少したことで南京と「死」のイメージがつけられながら、支那事変の目的が単に国民政府膺懲だけでなく、東亜平和の確立という大きな目標が強調されるようになったことがわかる。

(b) 南京市内の混乱

国民政府は、11月20日に南京遷都を行うことを発表した。これに伴い、南京陥落が現実味を帯び始め、南京の様子を伝える内容の記事が増える。特に、南京遷都後、南京市内が混乱している様子を伝えるものが多くを占めた。例えば、11月18日の『東朝』では、民衆が南京陥落を恐れて避難を急ぎ、交通機関が大混乱に陥っていることが報道された¹⁰²⁾。また、多くの民衆が避難したため、南京は再び民衆のいない「死の都」というイメージが付けられた¹⁰³⁾。

このように、南京遷都に伴い市内の混乱が多く報道される一方、蒋介石は日本軍に抵抗する姿勢を見せため、南京市内をより一層混乱させていると解説された。さらに、次節でその詳細は紹介するが、南京の支那軍の士気の低下を伝える報道も見られるようになる。例えば、『東朝』は、国民政府の内部対立が激化し、それぞれの立場から「長期抗日」の利用価値を見出して民衆を飢餓に陥らせており、前線の支那軍の戦意がないことを報道している¹⁰⁴⁾。つまり、国民政府は民衆だけでなく支那軍に対しても無理を強いて、士気の低下を招いていると分析する報道が行われた。

以上のように、南京陥落が間近に迫ると、南京から避難する市民や前線の支那軍の士気の低下が報道され、南京市内の混乱の様子を伝える記事の盛り上がりが見られた。

(2) 陥落後の南京の認識

(昭和12年〈1937年〉12月14日～昭和13年〈1938年〉3月1日)

本項では、南京陥落以後、支那事変全体の中で南京陥落の意義がどのように論じられたのか、また、支那事変の展望についてどのように議論されたのか、それらの報道の内実を明らかにする。

(a) 南京陥落の意義

12月13日、日本軍の攻撃によって南京が陥落したが、支那事変全体の中で南京陥落はどのように意義づけられていたのか当時の日本の報道から検討する。そもそも、事変の目的は支那を膺懲し、東亜の平和を確立することを意味していた。そこで、南京陥落によって支那の膺懲が達成されたかどうかについて注目すると、調査した新聞記事や雑誌記事では、否定的な意見が見られ、肯定的な意見は見られなかった。

その一方で、支那の民衆を苦しめている蒋介石が反省していないということに注目した記事が多く見られた。例えば、『東日』は、南京が攻略されてもお蔭介石は反省の色を示しておらず、日本国政府内では蔣政権否認の意見が出ていると解説していた¹⁰⁵⁾。つまり、南京陥落を前にして、国民政府、とりわけ蒋介石は反省をしていないと認識していたのである。また、年が明けた昭和13年(1938年)1月16日、第1次近衛内閣は、南京攻略後、支那政府が反省するのを待っていたものの、その様子が見られないため、「国民政府を相手とせず」、新興政府との国交調整を希望していると発表した¹⁰⁶⁾。これは、国民政府に反省の色が見られないために、彼らと外交を行う必要がないとの判断に基づく決定であった。

(b) 支那事変の展望

南京陥落後、支那事変における同陥落の意義が議論された他に、陥落を境として支那事変が今後どのように進展するのか、あるいは収束するのかが多く議論された。まず多く示されたのは、このまま戦争を続けるという立場である。例えば、田村幸策は『外交時報』誌上において、近衛首相は国民政府が反省するのであれば、戦争の継続を止める考えを示しているが、国民政府は反省のために与えられた期は既に経過しており、いくら反省してももはや、日本政府の相手にはならない状況であるとして、残党に対する追及の手は緩めてはならないと主張している¹⁰⁷⁾。前述の通り、国民政府が反省することは、南京市民を苦しみから解放し、長期抗日の姿勢を崩すことであった。しかし、南京陥落後の国民政府は長期抗日姿勢をとり続けており、膺懲という目的達成のため戦争の継続を主張したのである¹⁰⁸⁾。その際、「真の持久戦」¹⁰⁹⁾や「勝って兜の緒を締めよ」¹¹⁰⁾という言葉が用いられた。

一方、南京陥落によって戦争が一段落すると予想する見解も散見された。また、南京陥落を境に戦争が終息に向かうと予想する議論では、支那事変の目的である東亜の平和達成に、より焦点を当てている傾向があった。例えば『東日』で新城

新蔵は、南京陥落によって、支那事変の山は見えたと述べながら、蒋介石に少しでも責任を感じる心があったら和平への道を歩まねばならないし、既に支那国民の心が離れているのなら日本が支那国民と東洋平和のために新政府を擁護するのは当然のことであると主張した¹¹¹⁾。つまり、蒋介石への膺懲ではなく、東亜の平和を確立するために、蔣に戦局の收拾を行うよう求め、支那の復活と東亜の進展を望んでいたのである。

このように、南京陥落後、今後支那事変がどのように収束していくか盛んに議論がなされた。それらは大きく分けて、支那の膺懲を達成するために戦争を継続すべき、あるいはするであろうとする見解と、東亜の平和を確立するために戦争は終息するだろうとの展望に分かれた。前者の報道からは戦争継続を主張する意見がほとんどであったものの、後者の南京陥落を契機に戦争を終わらせるべきだと考える見解からは、それを望む国民もいたことがわかる¹¹²⁾。

2 国民政府の内情

本節では南京陥落以前から南京陥落直後の4か月間において¹¹³⁾、日本のメディアが国民政府内の派閥や対立をどのように報道していたのかを検証し、当時の日本が抱いていた「国民政府」像を明らかにする。結論を先取りすると、2つの見解が浮き彫りになる。1つは連敗続きの蒋介石政権の弱体化を強調して批判的に捉える見解であり、もう一方は国共合作で台頭した中国共産党への警戒心である。国民政府内の派閥対立に注目しながら検証を行う。

(1) 南京陥落以前の派閥についての動向を巡る観測

本項では、南京陥落以前の昭和12年(1937年)10月1日から同年12月12日までの国民政府内の派閥や勢力がどのように観測されていたのかを検証する。『大朝』は国民政府内を、蒋介石派、共産党派の2つに分類し、敗走する蒋介石に乗じて共産党が暗躍し始めたと書き¹¹⁴⁾、同政府内の派閥対立を論じている。本項では、この報道を参考に分析を進める。

(a) 蒋介石政権

昭和12年7月7日の盧溝橋事件以降、南京陥落に向かい連敗を重ねる蒋介石政権に対しては、その勢力を軽んじるような記事が多くみられた。例えば、10月24日『東朝』は、いち早く蔣が南京を脱出したことを報じている¹¹⁵⁾。実際に南京が陥落するのは12月13日であり、陥落の約2か月前に避難した蔣の弱気な姿勢を

取り上げている。同日に発刊された『大毎』にも蔣の南京脱出に関して同様の記事がみられる¹¹⁶⁾。

11月11日『東日』では、蔣政権の財政面からも、その劣勢に言及している。前年度からの干ばつや納税者の徴兵により租税による財政収入の見込みが立たず、その上、関税収入の中心である上海が日本軍の手に落ちたことにより、蔣政権の財政事情は致命的であるとし、同紙は「『長期抗戦』もいまは断末魔の悲鳴」と評している¹¹⁷⁾。

派閥対立の視点からも蔣政権の脆弱性が指摘されている。例えば、11月19日『大朝』において、共産党系や白崇禧派の流入により蔣政権は名目だけになっていることを伝えており、深刻化した派閥対立から逃れるための遷都であるとの分析もあった¹¹⁸⁾。特に、蔣政権と共産党との結びつきについて批判的な意見は多い。『改造』10月号で、下条雄三が西安事件で蔣は共産党に魂を売ったと評されているのはその典型である¹¹⁹⁾。同様に、馬場恒吾は西安事件によって蔣は共産軍に弱みを握られたのではないかと観測していた¹²⁰⁾。このように、防共の観点より共産党と結びつきを強める蔣政権を警戒し、批判的に捉えていた。

12月に入ると南京陥落が間近になり、陥落後の蔣政権没落の予測が行われるようになる。この時期から蔣政権に見切りをつけ、親日新政権の設立に注目するようになっていたことがわかる。

以上、南京陥落以前の蔣政権とその内実についての報道を紹介した。蔣の南京脱出、南京遷都や派閥対立など様々な切り口があったものの、各社とも継続的に蔣の劣勢を報じていたことがこの時期の特徴である。

(b) 中国共産党

中国共産党に関しては10月からその影響力を脅威と捉える記事が散見されるようになり、南京陥落直前までその報道姿勢は継続される。調査期間において最初に共産主義の影響力に注目した記事は、10月4日『大朝』である¹²¹⁾。同記事ではソ支不侵略条約締結を機に、国民政府が南京・上海方面で資本及び地権の均等、工賃の値上げ、就業時間の厳守など、共産主義的政策を逐次実行すべく準備中であると報じていた。中国共産党の名前は上がっていないが、ソ支の関係が密接化するにつれて大陸での共産党の影響力が強まっていることを窺わせている。

10月30日『東日』では、共産党が大陸の指導者の立場を虎視眈々と狙っているとし、現段階では蔣政権とは摩擦を起こさず、将来的な共産党の躍進に有利な状況を醸成しようとしていると観測していた¹²²⁾。翌日の『読売』では、支那事変

によって蔣政権を疲弊させ、反蔣の気運を高めることで指導者の立場を狙っていると分析している¹²³⁾。

11月になると、共産党の台頭をより直接的に取り上げるようになる。11月13日『読売』の共産党が「軍権乗取を目論む」、「南京政府今や崩壊の前夜」という見出しがそれを象徴していた¹²⁴⁾。11月後半になると派閥対立に関する記事も散見されるようになるが、派閥対立の中では蔣一派対共産党・その他の派閥（西南派や馮玉祥一派）の枠組みの中で取り上げられている。その代表的な記事が11月19日『東朝』であり、馮一派は「共産党と合流し一挙に反蔣クーデターを執行して和協空気を一掃し強硬抗日派で政権を掌握せんとする模様さえあり」と伝えている¹²⁵⁾。翌日にも馮一派と共産党の反蔣クーデターの動きを取り上げ、注目している¹²⁶⁾。蔣政権が連敗続きで弱体化している状況に鑑みて、共産党の方針が少しずつ変化していることを注視していた。このように共産党の方針変化を捉えつつも、同党が蔣政権を抗日に導き疲弊させる目標を抱いているとの認識においては一貫していた。

以上、南京陥落以前の共産党を巡る報道を紹介した。当初からその存在を認知され、蔣政権を凌駕する脅威としてとらえられていたことがわかる。このように、一派閥にすぎない共産党が注目されたのは、同党を後援するソ連の存在が考えられる。

(2) 南京陥落以後の各派閥についての動向を巡る観測

本項では、南京陥落以後の昭和12年（1937年）12月13日から昭和13年（1938年）1月31日までの国民政府内の派閥や勢力が、どのように観測されていたのかを検証する。この時期には第一次近衛声明が発表されることになるが、1月になると従来の報道とは異なり、各派閥が統一の方向に向かうことを予測する報道が展開される。

(a) 蔣介石政権

蔣政権については、南京陥落以前とほぼ同様の存在として伝えられていた。12月14日『東朝』では「蔣介石なお豪語す」との見出しがつけられているように、陥落以前と同様に強弁する蔣の様子が報道されている¹²⁷⁾。同日には近衛文磨首相の会見が取り上げられているが、近衛は「今や一箇の地方軍閥に転落しつつある今日」と述べ¹²⁸⁾、首都を失った蔣政権を地方政権としてとらえる見解が生まれていた。さらに、同日の『大朝』は、南京陥落の意義は国民政府の地方政権へ

の転落のみではなく、名実ともに東亜恒久平和の全責任者の地位を獲得したことであると述べ、その意義を強調している¹²⁹⁾。

したがって、各紙とも南京陥落以後、支那事変は東亜の平和のための戦いであることが強調されることになる。例えば、12月15日『東朝』では、事変の原因は国民政府の抗日容共政策が原因であり、この政策を徹底的に是正することが東亜の平和を保障するには不可欠だとしている¹³⁰⁾。このように、南京陥落以降は蔣政権を打倒すること自体に目的があるのではなく、「東亜の平和」確立のための通過点と位置付けられていく。

他方、派閥対立から、蔣のより一層の劣勢を報じる様子も看取できる。12月21日『東朝』では、南京陥落後蔣直系の兵は戦意を失っている一方、共産軍は西安周辺に相当な実力を保有していることが報じられ、重慶や漢口では共産派の勢力が圧倒的で国民党は手も足も出ないと評されている¹³¹⁾。さらに、12月27日『東朝』では、西南派と蔣の対立を取り上げており、抗日決戦に敗れた責任を取って蔣が下野しなければ、西南派との対立は爆発するだろうとも予測している¹³²⁾。これらの記事から、南京が陥落したことを理由に他派からの攻勢を受け、蔣政権の立場が弱くなると予想されている。

こうした状況の中、1月16日に第一次近衛声明が発表された。「国民政府を対手とせず」の言葉通り、国民政府との交渉を打ち切りにし、「新興支那政権」の成立に期待すると宣言したのである。「新興支那政権」とは北京の臨時政府を指している。日本政府は、根拠地でもある南京を落とされても降参せず離合集散を繰り返す蔣政権に見切りをつけ、親日の臨時新政府に期待し、それとの交渉を望んだのである。第一次近衛声明が発表された翌日、『大毎』は新政権待望気運が高まると述べ、交渉相手が蔣政権から臨時新政権へ移行することを示唆していた¹³³⁾。

(b) 中国共産党

南京陥落直後、抗日統一の気運が観測され国共の提携強化が予測された。国民政府内での共産党の影響力が増大するとの予測は、共産党員が大本営に組み込まれたことを根拠にしている。共産党の毛沢東や朱徳などの将領が国民政府の要職に就任したからである¹³⁴⁾。また、12月19日『東朝』は、国民政府が対日長期抗戦を決意し、ソ連から一層の援助を得るために共産党との提携強化の方針で軍事、政治体制の改組を決定したことを伝えている¹³⁵⁾。長期抵抗にはソ連の援助が不可欠であり、その窓口として共産党が目されたのである。このように、南京陥

落直後には国共合作の動きが注目された。

国共提携の動向が多く報じられたが、南京陥落から1週間が経過すると、共産党が蔣政権に対して臨時国民大会招集を提議したことにより、異なる事態への展開が注目されることになる。この大会において、共産党は長期抗戦に適合する新政府を樹立すべきと主張するが、これは従来の国民党一党主義を排撃しようとする動きであった¹³⁶⁾。従来共産党は、蔣政権からの軍政参加要請を暗黙裡に拒絶してきたが、南京陥落を機にその方針を変更したのである。この動きは国共の提携にも見えるが、蔣政権の弱体化に乗じて共産党が政権奪取のために行動を起こし始めたとも捉えられる。12月25日には、蔣が共産党のゲリラ戦術の採用を決定したことが報じられる¹³⁷⁾。国共合作を謳いつつ共産党が蔣の実権を脅かしていると観測され、注視していたことがわかる。

しかし、こうした動向は翌年になると報道からは消え、むしろ抗日という共通目標から蔣を中心に団結するだろうとの観測が大勢を占めることになる¹³⁸⁾。また、蔣政権の座を虎視眈々と狙う共産党の動向ではなく、北京の新政権に期待を込めた記事が多くみられることになる。蔣政権や共産党より新政府への期待から注目する対象が移行していた。

本章では、南京に関する新聞報道や雑誌記事から、南京や国民政府に対する認識の変化を検証した。第1節では、陥落前の南京への注目は南京空襲を端緒とし、それ以降の南京に関する報道の盛り上がりと、陥落後の支那事変の展望に関する議論に着目した。陥落前は、南京が軍事的に重要な都市であることが紹介されながら、支那事変の目的が支那の膺懲と東亜平和の確立だと伝えられた。その際、同市は「死」と連想させて伝えられ、また、空襲に伴う南京市内の混乱の様子も伝えられた。さらに、陥落後は、支那事変の目的が達成されたかに関連して戦争継続の有無について、継続が多数を占める中、少数ながら収束するだろうとの見解も散見された。

第2節では、南京陥落後の、国民党を中心とした派閥対立に着目した。蔣政権に対しては終始批判的に伝えていたが、共産党や西南派については、蔣政権の地位を脅かす脅威としてとらえていた。そのため、派閥対立や国共分離が予測されていたが、南京陥落後の1月になると蔣を中心として各派統一されたことを伝えていた。その背景には、新政権を交渉相手としていた日本側の期待が看取できる。

IV 南京陥落をめぐる対外関係

本章では、南京陥落前後の昭和12年(1937年)10月から昭和13年(1938年)1月における支那と日本の対外関係について追ってみたい。日本と交戦状態にあった支那に対してイギリスやソ連などの第三国は支援を行っていた。また、南京攻略戦に際してアメリカと日本の間でパネー号事件が起きるなど、支那事変には列強諸国が関係した。それらが日本のマスメディアにおいてどのように報じられたのか、イギリス、ソ連、アメリカの三国に関する報道を対象を絞って明らかにしたい。

1 南京陥落前後におけるイギリスの支那支援

本節ではまず、南京陥落前後の昭和12年(1937年)10月から翌年1月にかけて、当時の新聞や雑誌が日本の敵国といえる支那に対してイギリスが行った支援をいかなる視点から報道したかを検証する。その上で日本は貧弱であり勝てるはずがないと諸外国に考えられていた南京陥落前と¹³⁹⁾、想像もつかないような日本軍の快進撃によって南京が陥落した後における変容に注目して考察を加えてみたい。

(1) イギリスの動きと英支関係の変遷

本項では、南京陥落以前の南京への空爆が本格化してきた昭和12年(1937年)10月から南京陥落後の昭和13年(1938年)1月までの期間、事変の展開に沿って、イギリスによる支那支援の動きとそれによって英支関係がどのように変化したと観測されたか、当時の新聞報道から明らかにする。

イギリスと支那の関係を見ていく上で注目される点としては、この戦争が始まる1世紀前、アヘン戦争においてイギリスがまさに南京陥落の一步手前で講和に入ったという事実である。『大朝』の記事の中では、この1世紀前の出来事について、「白人の餓虎がいかに鋭い爪牙を支那大陸に加へたかに切齒扼腕を禁じ難いものがあるのだ」と述べている¹⁴⁰⁾。また、支那事変において国民政府を支持することについて、安藤克夫は『改造』誌上において、一昨年実施された幣制改革で完全に支那はイギリスに握られており、イギリスは国民政府を通じて權益を獲得しているので、国民政府の存続は重要事項であると指摘している。その上でイギリスは赤化を防ぎながら自国の權益を守りたいと思っているとも論じてい

た¹⁴¹⁾。つまり、支那事変において、イギリスは支那を支援する国であったが、その1世紀前には支那を侵略した敵国であり、イギリスの支那支援の目的は、二度にわたるアヘン戦争等を通じて獲得した極東権益を擁護することにあったことが示唆されている。

この点をふまえたうえで、日本のメディア上に見える昭和12年（1937年）10月からのイギリスの支那支援に対する認識の変化について見ていく。10月頃のイギリスにおける世論について、『読売』は「英国の輿論硬化は見え透いてゐる、南京空爆までは我慢も出来たらうが、粵漢鉄道の爆破敢行がみんごと急所に命中したのであわて出した」と解説している¹⁴²⁾。また、同時期にイギリスは支那の政府系4銀行が上海を引き揚げようとしたことを阻止している¹⁴³⁾。これはイギリスが支那金融界に対する影響力が弱まることを恐れたためであると分析していた。すなわち、イギリスの目的は単なる経済支援ではなく、支援を通じて支那における権益を強固なものにすることにあったと認識されていた。

11月になると上海戦線が日本有利に傾き始めたが、『東日』はそれについて、「上海戦局が、わが軍に有利に展開し、上海の孤立はまぬかれ難き形勢となり、南京政権の倒壊は時間の問題となつたので、その補救案として、南市、浦東の局部中立案が英、米、佛の上海在住の海軍提督を通じて日本側に」示されたと書いている。この動きは南京政権が悲鳴をあげているとの前提に立っていたが、その背後には支那が欧米依存の精神を捨てず、あくまで第三国の介入をもって日本を牽制しようとする支那の意図があるとの認識を示していた¹⁴⁴⁾。支那は自身の政権に決して有利とはいえない局部中立案のような政策を提案されても、欧米への依存をやめられないであろう。これは戦闘力の源泉である上海南市と南京の連絡遮断が迫って来たために英米仏の当局を動かして最後の命脈を保持しようと策動している結果と捉えられることになる¹⁴⁵⁾。しかし、戦局の流れには逆らえず、支那はイギリスによって反対されていた政府系4銀行の引き揚げをせざるを得ない状況になる。このことはどの新聞でも記事にされており、日本軍の快進撃を読者に印象づけていた。

これらの動きをふまえ、支那事変の動向に最大の関心を払っていたイギリスは戦局の新展開となる日本軍による上海包囲を重大視するとともに、国民政府の全面的崩壊に先立ちその解決に何らかの打開策を求めることになる。こうしたイギリス出先当局の動きは日本メディアの注目すべきものとなっていた。この時期、イギリスが支那に対して経済的援助を既に行っていたことをふまえて、『東朝』

は「南京政府は上海との断絶により財政的に多大の脅威を受けており、財政政策に一大変化が訪れようとしている。紙幣の一部が在外資金に回されているという事実から英支関係の現状を知ることが出来、南京政府の信用はイギリスのサポートにあるが戦争の進展とともに廃屋に化そうとする南京政府に、イギリスの援助も危機に逢着しようとするのは必然とされる」¹⁴⁶⁾と述べている。大国であるイギリスが経済的援助を行ったにもかかわらず、国民政府が財政破綻に瀕するに至った原因については、南京政界や上海財界を牛耳っている中央要人が十分に国家観念に目覚めず、私利私欲を図って真実に国民の福利増進に努力しないからであると分析されている¹⁴⁷⁾。

このように日本軍の上海包囲によって支那の南京政権の瓦解が始まるとみられていたわけだが、支那はイギリスにどのような支援を求めようとしていたのか。『東朝』では、支那がイギリスに縋ることについて、上海が日本軍に包囲されたため、対外連絡路は全て香港経由となり、国民政府の今後の運命はイギリスに託される形となったと解説している。また、「国民政府は海南島その他南支一円の利権をすべて英に移譲し、代償として英の支援に縋るものとみられる」という観測もなされている¹⁴⁸⁾。しかし、実際のイギリスの動きを見てみると、イギリス当局、陸軍専門家は南京陥落が近いことを予想し、早くも蒋介石に代わる人物を探すなど、現実の事態に善処しようとする態度に傾いていく。これはイギリス側が支那軍のもろさに失望し、実力を認識した結果であって、日本軍の敏速なる進撃にはイギリスの専門家も驚嘆しているとし、国民政府が求めている支援を果たしてイギリスが行うのか怪しい状況になっていると見られていた¹⁴⁹⁾。

12月に入り、南京陥落がより間近に迫ってくると、イギリス国内における議論も報じられるようになる。イギリスから見た今後の展望としては、支那敗北の遠因として連盟の無力、ブリュッセル会議の失敗、英米協力の欠如等が問題視されているとする。イギリスは、今は成り行きを観望する形ではあるが、日本の占領地域への政治工作によって北京に樹立されようとしている新政権により、事実上今後の支那の運命が決定されるだろう。しかし、その一方でイギリス政府はあくまでも蒋介石政権を支持する構えであるため、日英の新たな対立は避けられないと考えられており、また、香港という英国領土に関する不安と支那の完全な無力化を焦慮しつつあると報じていた¹⁵⁰⁾。

南京陥落後のイギリスの動きについては、『東日』においてサンデー・タイムス紙記者が、イギリスは「支那水域に対し軍艦を増強すれば、英国の在支権益を

尊重せしめるにたる兵力を確保しうるとの見解に達した模様だ。」と解説していることを伝えていた¹⁵¹⁾。イギリスが日本の軍事力を過小評価してきたのは誤りであったことを示唆する記事であった。翌年1月に入ると、北支占領を第一段階として上海や南京が陥落しても驚かずにいるイギリス世論が存在したが、植民地である香港の陥落が怪しくなると、警戒心からそれが硬化するに至ったとの分析や、日本を止めるべきがないとして極東問題への興味が失われつつあるように見えるとの報道も並行して行われていた¹⁵²⁾。

金融面については、支那事変後、イギリスが支那に対して行ってきた財政援助については、もともと支那の財政は半植民地制に基づき、イギリスの対支投資と支那市場の将来に関するロンドン財界の深い関心とに支えられてきたと解説され、それは歴史的延長線上に捉えるべきとの考えが示唆されている。また、国民政府が上海や南京を放棄せざるを得なくなった現在、蒋介石政権の支那幣制に対する支配力が今後下がることは間違いないとの見立てもなされることになる¹⁵³⁾。

(2) 反日運動へのイギリスの支援

前項では主にイギリスによる支那支援の動きについて見てきたが、本項ではイギリスの支那における抗日意識への影響についてみていきたい。具体的には、イギリスが音頭をとった反日運動についての報道を中心に検討する。

支那事変の進展を受けて、反日運動がイギリスを中心に支那に波及していると考えられた。こうした波及を阻止すべく、日本軍の南京空爆の目的は軍事施設の破壊であり、生命財産に対して危害を与える意図はないと弁じることになる¹⁵⁴⁾。しかし反日運動の勢いは止まらず、『大毎』の記事ではロンドンのアルバート・ホールにて反日大会があったことが伝えられている。このイギリスの反日運動により、「近年、蒋介石を中心とする南京政府は、愈英国化され、英支提携工作は益々親密を加えて来た。と、同時に、支那の抗日運動は俄に猛烈になって来たのである」¹⁵⁵⁾ という記事からもわかるように、支那の大々的な反日運動の背後にイギリスの存在を見ていたのである。

他方、南京陥落が近づいてくると、支那の南京放棄で最大の影響を受けるのはイギリスであるため、イギリスの対支援助の政策は「対日媚態」の政策への豹変が生じているとも観測された¹⁵⁶⁾。蒋介石の没落により最も大きな痛手を蒙る可能性のあるイギリスとしては、日支間の調停へ介入をするきっかけを狙っているとも指摘された¹⁵⁷⁾。こうした予測も一部には行われたものの、蒋介石の支援勢

力はイギリスであり、支那の今後の長期抗日の成功はイギリスの援助にかかっているとの認識は維持されることになる。

イギリスは以上のような反日運動を展開したが、支那の戦局の悪化に伴って「対日媚態」へ豹変するとの予測がある一方、この反日運動の裏に支那事変を継続させようとするイギリスの意図を読み取ろうとする解説も行われていた。支那が首都南京を失ったのに加えて、その他の経済的基礎をほとんど完全に喪失しても屈服しない原因の1つは、イギリスの支援、あるいは圧力があるためとされたのである。支那は戦争に負けない自信があったから屈服していないのではなく、抗日運動からの圧力と英米仏ソ等欧米列強からの外部的支援ゆえに、日本軍に降伏できない状況に追い込まれていると観測された¹⁵⁸⁾。

2 南京陥落前後におけるソ連の支那支援

本節では南京陥落前後の支那とソ連の関係性について、日本のマスメディアがいかにつえていたのか明らかにする。支那事変勃発以前より、支那とソ連の両国は地政学的、歴史的、イデオロギー的に断つことのできない関係にあると見られていた。その関係は事変下でも変わらず、実際、日本と交戦していた支那に対してソ連は支援を行っていた。このような両国の関係について、第1項ではソ連による支那への軍事的支援について扱う。第2項ではソ連により推進されたと考えられていた赤化に注目しながら、関連報道に検証を加える。第3項においては、当時の日本にとって敵国であった支那に対し援助を行っていたソ連を、日本のマスメディアがどのように捉えていたのかを確認しながら、日本と支那とソ連の三国の関係についての認識を明らかにしてみたい。

(1) ソ連による軍事的支援

日本と戦争状態にあった支那に対してソ連は軍事的な支援を幅広く行っていた。本項ではそれら支援の内容とその変遷がどのように認識されていたのかについて、軍事物資支援と人的支援の2つの側面から検討する。

(a) 軍事物資支援

日本と交戦状態にあった支那に対してソ連は多くの軍事物資を輸出していた。昭和12年(1937年)10月28日の『東朝』では小型戦車30台、機関銃70機、大砲16門が蒙古人50人とともに西安に到着したことが報じられ¹⁵⁹⁾、陸戦に必要な兵器を中心に供給されていたことが伝えられている。

ソ連側は支那に対して物資援助を行っていることを隠そうとしていたようで、極東への軍事輸送の露見を防ぐために国際列車を止めていたことが報道されている¹⁶⁰。つまり軍事物資の支援はあくまで秘密裏に行われていたと考えられる。しかしソ連の軍事的支援は日本の新聞において大々的に報道されていた。

中でもソ連製のII-16戦闘機¹⁶¹を中心とした航空機の輸入が脚光を浴び、11月下旬頃からどの新聞においても頻繁に取り上げられている。支那が輸入したと推測される戦闘機の数、真偽は不明ながら日に日に増加していく様子が伝えられている。支那の戦闘機事情に対する日本の注目度の高さが窺える。

ソ連製戦闘機に対する日本側の報道の特徴としては、その性能を評価しつつも日本の空軍戦力が支那及びソ連と比べて劣っていないことが同時に強調された。ソ連製戦闘機の性能に関する詳細が語られた、昭和12年（1937年）12月3日の『大朝』の記事がその典型である¹⁶²。該当記事では、支那へ輸出され使用されているソ連の戦闘機は最新鋭の物であるが、同じく支那に輸出されたアメリカ製マーチン重撃機も含めて日本軍側が一機の損害もなく撃墜したことが紹介されている。

以上見てきたように、ソ連が支那に対して戦闘機の輸出に代表される軍事物資支援を継続的に行っていることが注目されていた。また、南京陥落前後を通じ、特にソ連製航空機の支那への供与についての報道が多く行われ、同時代の日本がかかる支援に神経を尖らせていたことを窺うことができる。他方、かかる報道の中では、ソ連製戦闘機の性能の高さを引き合いに出しつつ、それを撃墜できる日本軍の優秀さや国産機の性能を賞賛したものが多く見られた。これは支那に勝っている日本の姿を強調し、国民全体に周知させる意図があったと考えられる。

(b) 人的支援

支那に対するソ連の支援は軍事物資だけでなく人材の派遣にも及んだ。各紙が盛んに報じているのは、ソ連人飛行士の派遣である。調査期間内で初めてこの話題が報じられたのは昭和12年（1937年）10月17日付の『東朝』からで、全滅に瀕している支那空軍が密かに外国人飛行士を募集する正式契約を行い、アメリカ人やソ連人の飛行士が集結、既に南京方面の前線で6人が活動していることが報じられた¹⁶³。飛行士の斡旋は日本軍が南京への本格的な攻撃を始める前から開始しており、それまでの戦闘の結果、支那空軍が人手不足に陥っていたことがわかる。

また、この人員不足の原因については、日本との空中戦によって人材を喪失しただけでなく、空軍内部の不和にも一因があったとされた。例えば12月2日の

『大朝』では支那空軍の派閥について詳しく解説されている¹⁶⁴⁾。支那空軍にはもともと広東派と浙江派という2つの派閥が存在したが、支那事変の空中戦において浙江派は歴史的に優れている広東派を前線に送り、自身は後方にて功績のみを得ていた。このことに対して広東派が不平を抱き、上海放棄後に南京に帰ることなく姿を消した。その結果、飛行士が不足したばかりでなく、ソ連などから軍用機が到着しても訓練・戦闘を任せられる広東派がおらず蔣介石は大狼狽したとのことである。以上からは支那空軍が決して一枚岩の組織ではなかったこと、日本が敵国の組織事情に関心を持ち観測していたことが看取できる。

ソ連からの人材派遣は飛行士以外も行われており、彼らは抗日支援と絡めて報じられる場合が多かった。例えば『偕行社記事』では、ソ連が極東赤軍により訓練されていた外蒙軍を国民革命軍の一翼として南京政府軍事委員会の傘下に移し、事実上蔣介石政権を武力支援して長期抗戦を実現させるなどの方策を取った¹⁶⁵⁾ことが論及されている。また、支那の抗日を強固なものにするために士官の派遣や¹⁶⁶⁾、ソ連軍司令官を顧問として送り抗日軍の再編を行っていることなどが伝えられ¹⁶⁷⁾、飛行士の場合と同様に国家単位でのソ連の関与が示唆された。

以上見てきたように、ソ連による支援は物的支援だけでなく飛行士をはじめとする積極的な人的支援にまで及んでおり、そのような派遣の背景にはソ連が国家として関与していることが確信された。こうした報道を通じてソ連の対支支援に神経を尖らす日本の姿を確認することができる。

(2) ソ連による赤化推進

第1項で見てきたように、ソ連は支那に対して軍事的な支援を数多く行ってきた。しかし軍事的支援にとどまらず、共産主義国であるソ連は共産主義のイデオロギーを広めようと支那に干渉していた。この動きは日本が南京への攻撃を始める前から存在している。日本もこうしたソ連の動向を警戒しており、国民政府とソビエトロシアの政治構造はほとんど同じと言及している記事もあった¹⁶⁸⁾。また一歩踏み込んで「支那事変の原因は排日、侮日になるがその原因を醸成せしものは(一)コミンテルンの赤化侵略であり(二)第三国の政治的勢力の関与である」¹⁶⁹⁾と、南京陥落を含む支那事変の勃発自体と赤化侵略を結び付けて論じる記事もあり、今回の事変はソ連が支那の「赤化を進めるうえで有利」¹⁷⁰⁾だと評価する見方がされている。また、昭和12年(1937年)11月の時点で蔣には「赤化しない」自信があり、スターリンには「赤化せしむる必要がない」との見解も一

部には提示されていた¹⁷¹⁾。しかし総じて当時の日本のメディアからは、本事変及び南京陥落においてソ連が支那の赤化を企てているとの認識を有していたことが看取できる。以下、その点を確認してみたい。

まずソ連は支那の赤化推進のために前項で論じたような軍事的支援を行った。具体的には日本と交戦するための資源が不足している支那に対して支援を約束する代わりに赤化に関する条件を提示することで、蒋介石政権内でのソ連の影響力の拡大を図っていると観測されていた。先ほど紹介した、南京陥落後の昭和12年(1937年)12月18日にソ連が支援の条件として提示した「政府や軍幹部への共産党員の採用」¹⁷²⁾がそれを象徴しており、明らかにソ連の意図を汲む共産党系の人材を政府内に配置することを求めている。

共産党系の人材は蒋介石政権内に配置された後、支那の政策にソ連の意向を反映させることを試みた。このようなソ連の赤化推進の動きは抗日支援の面でも顕著に表れた。そもそも南京が12月13日に陥落するより以前から支那には対日融和的な雰囲気があった。12月11日の『東朝』などが「支那財界では南京陥落をもつて戦局の一段落を意味するものとして和平気分濃厚となり自国の敗戦を忘れてこの時期の意外に早く到来したことを寧ろ歓迎してゐる」¹⁷³⁾などと報じたのはその典型であろう。しかし「政府要人等の間には早くより対日妥協の主張が存在したが、共産派の要人等は、その従来立場より対日主戦論の一点張りで(中略)支那を断崖にひきずり込みつつある」¹⁷⁴⁾と報道されたように、共産党が南京陥落後の蒋介石政権をして抗日継続へと導いていると分析されていたのである。

このようにソ連及び共産党は中国共産党軍を強化し、その首脳を国民政府に起用することを条件として援助を行うことで積極的に支那の赤化を推進した。それに対して日本は、ソ連は「支那の内部に食ひ入り日本に対抗せんとする」¹⁷⁵⁾と認識したのであった。

(3) 日本のソ連に対する認識

第1項、第2項で確認してきたように、ソ連は支那に対して多大な支援やそれと紐付けた干渉を行っていた。そのことは本事変において支那と敵国の関係にあった日本も注視するところであった。本項では支那の背後にいるとされたソ連の動きを日本がどのように報じ、評価していたのかについて明らかにしたい。

ソ連は支那に対し諸外国と比較しても積極的な援助を行い、日本と戦う支那を影でサポートしてきた。その一方で支援の代わりに赤化推進に関係する条件を提

示するなど、必ずしも支那を無条件に支援していたわけではない。また、本来ブルジョワジー的な性格を持つ国民政府を共産主義のイデオロギーを持つソ連が支援することはおかしいとの指摘もあった¹⁷⁶⁾。このようなソ連の姿勢をめぐり日本では主に2つの見解が提示されている。

1つ目はソ連の真の目的はソ連の勢力拡大であって、支那の勝敗に関してはあまり関心がないという見方である。昭和12年(1937年)10月31日の『読売』で、ソ連の狙いは南京政府の「敗戦は当然の帰結とし、これによつて南京政府を極度に疲弊せしめるとともに、一方において国民を扇動して反蔣機運を醸成し蒋介石の政治的威信を失墜せしめて、これに代らんとする意図に基けることは明らかである」¹⁷⁷⁾と論及されているように、ソ連の赤化推進の行く先は支那の実質的な支配であると分析されていた。要するに赤化が成功さえすれば蒋介石政権の存否などは関心がないとされたのである。同様に『世界知識』では、支那が「勝利すれば対支武力援助を断行し、この威力によって中国赤化コースを決定的に進展させるであらうし、今日の現実の如く敗戦した場合は更らに一層の緊度をもつて、中国ソビエト化に邁進する」¹⁷⁸⁾などと、たとえ支那事変が支那の勝利、敗北のどちらに転んでも、それはソ連の勢力拡大には影響がないことが解説されていた。

2つ目はソ連が日本と支那の両国の力を削ぐために支援を行っているとの見方である。上記のように支那が勝っても負けても、ソ連の勢力拡大は約束されている。これに加えて支那事変が長期化し日本と支那が戦い続けられれば、戦況の悪化などに伴って支那や蒋介石政権の影響力が弱まるだけでなく日本の国力をも浪費させることが可能である。ソ連の目的は「蒋介石の支援ではなく、中国の民族革命と日本の国力浪費にある」¹⁷⁹⁾のであって、日本と支那の両国を一挙に弱体化させようとしていると警戒する認識が日本にはあった。

このようにソ連の対支支援は支那との友好関係ゆえであるというよりも、支那と日本を戦わせ続けることで両国の国力を削ぎながら、ソ連は自身の勢力を相対的に向上させることができるといふ国益に従った戦略であったと分析されていた。その意味で、ソ連は支那の敵でもあり味方でもあると日本では報じられていたのである。

以上本節で検討してきたように、ソ連は支那に対して軍事的な支援を通して蒋介石政権へ共産党の人材を送り込み、支那の赤化を進めると共に支那の政策に発言力を持った。しかしソ連の真意は蒋介石政権及び支那を助けることではなく、

あくまで前述の方法で支那に対する自国の影響力を高め、また日本と支那の国力を削いでソ連が優位の状況を創出することにあつたと観測されていた。

3 パネー号事件をめぐる日米関係

本節では、南京陥落に付随して生じたアメリカ艦船パネー号の誤爆事件に関する報道を取り上げ、事件当時の日米関係について、日本の新聞各社がいかに捉えていたのかを明らかにする。

(1) 事件発覚直後の報道

まず、事件の詳細が明らかになっていく過程を追うこととするパネー号事件が最初に紙面上に現れるのは、12月13日である。『東日』は同日発行の夕刊にて、当該事件を報じた¹⁸⁰⁾。これは艦隊報道部による同日午後1時の発表に基づく報道である。また、『東朝』は「米艦不祥事件」としてこの事件と各所対応を同日の号外にて報じた¹⁸¹⁾。そこでは、事件の概要に続いて、上海総領事岡本季正によるアメリカ上海総領事ガウスの訪問、駐支大使川越茂による駐支アメリカ大使ジョンソンへの電報、支那方面艦隊司令長官長谷川清中將による合衆国アジア艦隊長官ヤーネルの訪問の事実と、それぞれが遺憾の意を表明した旨が報じられている。ただし、発生当初のパネー号事件の取り扱いはずしも目立つものではないことは留意する必要がある。その後、『東日』が12月15日朝刊にて大本営海軍報道部による公表をするなど、次第に事件の詳細が国民に広く知られるようになる¹⁸²⁾。

(2) 日本側の誠意

事件の詳細が明らかになった後、新聞各社の関連記事は大きく2つの内容に収斂してくる。第1に日本の誠意ある対応を取り上げる内容、第2にアメリカの動向を取り上げる内容である。『東日』は夕刊連載の寸評「近事片々」の中で「私の慰問、彼の感謝。パ、フ両号¹⁸³⁾を繞つて日米の真情が流露する」¹⁸⁴⁾と記している。この数行の寸評はまさに日本の政府及び新聞各紙が目指す日米和解への道を言い得ている。すなわち、日本側は誠意のこもった対応をもってアメリカ側の情に訴え、対するアメリカの政府や世論もそれを斟酌して過度に事を大きくしない、というのが日本側の企図するところであった。その意図がいかに紙面上に反

映されていたのかを論じたい。本項では同事件をめぐる日本側の動向を報じる記事内容を紹介する。

(a) 日本政府及び軍部の対応

前述のとおり、日本政府や軍部は事件発生当初よりアメリカ各方面へ遺憾の意を表した。その後も政府関係者が遺憾や陳謝の意を表する報道は続く。例えば、『東朝』は外務大臣広田弘毅の駐日アメリカ大使ジョセフ・グルー訪問を報じ¹⁸⁵⁾、そこで同大使に宛てた広田外相の公文の全文を翌日に掲載している¹⁸⁶⁾。

また、日本政府によって決定された措置や軍部による援助についても報じられている。例えば『東朝』は、事件発覚直後における海軍の米艦遭難者救助の様子を伝えている¹⁸⁷⁾。ただし、見出しの大きさを同紙面上に掲載された陥落後の南京に関する記事の見出しと比較すると文字の大きさが同等以下であり、南京陥落前後の同時期にあってパネー号事件の優先順位が最上位ではなかったことが垣間見える。とはいえ、これらの報道が事件発覚後数日のうちにあったことは、日本政府の素早い対応を示唆しているといえる。この対応の迅速さはアメリカ側に良い印象を抱かせることになる。この点についてはアメリカの動向として次項にて触れることにする。

(b) 日本の民間に生じた動き

更に注目に値するのは、国民や新聞社など民間による動きを報じた記事である。まず新聞各社が揃って報じたのは、女子学生による米大使館訪問である。『東朝』は「優しい大和撫子」と題して、文化学院の女子学生が先生に引率されて米大使館のグルー大使を訪れたことを、写真を付しながら報じた¹⁸⁸⁾。

『東日』はこうした民間による動きに比較的焦点を当てているといえる。『東日』の上記特色をさらに裏付けるものとして、次に『東日』の常設コラム欄「三角点」による論説とその後の展開について取り上げる。12月15日、『東日』の「三角点」は赤木生による「パネー号代艦」と題された論説を掲載している。その要旨は次の通りである。すなわち、政府による対応の代わりに、「国民一般から資金を募集して、パネー号の代艦を再建し、これを米国海軍に贈つて東洋における日米親善の表徴とすること」を提案する¹⁸⁹⁾、という内容である。同記事は単なる一提案に過ぎなかったが、後に国民使節東京日日新聞社主筆高石真五郎は米紙ヘラルド・トリビューン社長オグデン・レイドとの懇談の中においてこれを引用し、その当日のワールド・テレグラム及び他の夕刊に掲載されたことで大きく注目されることとなった¹⁹⁰⁾。後日、『東日』はこの米紙掲載の事実を報じ、「日本の国民

的感情が米国内で益々はつきり認識され国民外交として大きな役割をつとめつつある」¹⁹¹⁾として、先の「三角点」の役割を自紙ながら高く評価している。このことは、新聞社が国民による動きを報じるのみならず、当該事件に関して積極的に外交に携わっていたことを示している。

上記からわかるように、パネー号事件に対する民間の慰問や寄付の動きは「国民外交」として広く展開され、新聞各社はそれらを紙面上で頻繁に取り上げることで、「国民外交」を牽引する存在であった。中でも、『東日』はこの種の報道に力を入れていたといえる。それは「三角点」のコラムがアメリカへ紹介された一件を通じて国民外交路線の立場を確立し、他社との差別化を図った帰結であったといえるだろう。

以上のように、新聞各社はパネー号事件が発覚して以来、日本政府、軍部及び民間による誠意ある行動を幅広く報道した。同時に、新聞社自体も積極的に国民外交を牽引する姿勢を示していた。

(3) アメリカの動向

本項では、前項で確認した日本側の動向と相互作用をなす、アメリカの動向に関する記事を紹介する。

日本の新聞各社は日本側の種々の動きを報じると同時に、アメリカの動向にも連日注意を払っている。ここでも記事内容による分類に基づいて、各種記事を紹介する。

(a) アメリカの新聞とアメリカ世論

まず、アメリカの新聞とアメリカ世論による、当該事件及び日本の捉え方について報じる記事を追っていく。『東日』はパネー号事件が米紙に大々的に報道されている事実を指摘しながらも、「事件とともに日本政府の陳謝が掲載されたので輿論は比較的冷静である」¹⁹²⁾ことを伝えていた。陳謝が掲載されていたとはいえ、アメリカの新聞がかなり積極的に論じていたにもかかわらず、世論が冷静であると評している点には疑問が残る。また、『読売』はアメリカ大統領フランクリン・ルーズヴェルトの所信として、「パネー号事件に対しアメリカ国民が常に冷静な態度を持ち徒らに過激な言動にとつて日米間の感情を激化させることを極力さけてゐることは衷心感謝に堪へない」¹⁹³⁾という発言を紹介している。ただし、これはアメリカ世論の実情を反映していると素直に受け取るべき性質のものではないかもしれない。ルーズヴェルト大統領のこの所信は、アメリカ政府と

して軍事行動を考慮しておらず、日米間の平和的解決を目指しているという旨を表明したものであった。この文脈の中において、対日世論に対する上記のようなルーズヴェルト大統領の発言には、アメリカの世論が過剰な反日感情で悪化しないように牽制する内政的な意図が含まれるようにみるのが正しいのではないだろうか。

以上、アメリカの新聞と世論について報じる記事を取り上げた。ここでは、アメリカの新聞がパネー号事件を積極的に報じ、日本に対するアメリカ世論は悪化していたことがわかった。その一方で、アメリカの対日世論の悪化を敢えて軽視し、冷静であるかのように報じる記事があったことは特筆に値することである。

(b) 日本によるアメリカへの期待

最後に、日本の新聞紙面におけるパネー号事件についての論説を紹介する。ここでは特に、『東日』がアメリカの態度好転への期待を論じた記事を取り上げる。なお、『東朝』はパネー号事件についての論説をあまり展開していない。

『東日』は「近事片々」にて、「事実を正視して米輿論冷静。大国民は斯くありたい」¹⁹⁴⁾と論じた。これはアメリカの冷静な輿論を評価し、「大国民」の振る舞いとして日本輿論の手本としたいという論調であり、これ以後の論じられ方は多少異なるものであった。

その後の論調は総じて、日本の誠意をアメリカに認めさせようとする論調である。『東日』は「余録」において、日本は「悪いことは悪いとしてあくまで友邦に対する礼儀をつくし誠意を表した」¹⁹⁵⁾であり、誠意が認められることを信じたという旨を論じている。ここでいう「誠意」が具体的に示すものは、深甚なる遺憾の意や公文による正式陳謝、賠償、責任者に対する措置、今後の保障など、前項でも触れたようなものである。また、『東日』の社説は、日本側は事件の経緯の伝達やその他対応に努めていることを述べた上で、「わが政府当局の叙上の措置は、必ずや右両国政府によつて諒とせられ、この不幸なる事件に関する交渉が、急速に円満なる解決を見るであらうことを信じたのである」¹⁹⁶⁾と、アメリカの認識について希望的観測を表した。これら2つの論説からは『東日』の論説における1つの認識が垣間見える。すなわち、『東日』は日本側の対応を積極的に評価しており、アメリカ側へ誠意を示すに十分な対応を行っているという認識を前提としていたのである。そうした前提の下に、アメリカの理解ばかりを一方的に望む論調が形成されていたといえる。

以上、パネー号事件に関する『東日』の論説を取り上げた。ここでは、アメリ

カを理解を一方的に求めるような論調が一貫して確認できた。『東日』は日本の対応を誠意あるものとし、その誠意を認められることを期待する形で日米関係の改善の道を論じていたといえる。

本節では、パネー号事件とそれを伝える新聞記事に着目した。南京陥落に際して各国と支那との関係および各国と日本との関係に転換が予測される最中に発生したこの事件は、アメリカとの関係を後退させかねない出来事として、日本国民にかなり注視されていたといえよう。

本章では南京陥落前後における諸外国と日本及び支那の関係について、日本のマスメディアがどのように認識し、報じていたのかを明らかにした。

第1節では、支那に対してイギリスが行った支援について検証した。関連報道の特徴としては財政援助が注目され、それはイギリスが支那における自身の経済権益を守るためだと観測されていた。またイギリスは支那の抗日意識にも影響を与えており、反日運動の背後にイギリスの支援が看取されていた。支那に対しての支援は次節で扱うソ連も注視された。しかしその注目はイギリスの方が大きく、経済支援を中心とするイギリスの目的は自国の経済権益を守ることにあるのに対して、軍事支援を中心とするソ連の支援の目的は赤化が主であり、違いがあることが明らかにされた。

第2節では、上記のように支那への支援国として英国とともに注目されたソ連を扱い、特に航空機やパイロットの供与を中心とする軍事支援の実際を追いながら注視されていたことを明らかにした。その上で、南京陥落前後におけるソ連の対支支援の目的には、支那の赤化と同時に日本と支那を戦わせ国力を削ることによって、ソ連が両国に対して優位な状況を確認することであると分析も行われていたことを指摘した。

第3節では、南京陥落時のアメリカへの認識について、特にパネー号事件に関する新聞記事に焦点を当てて論じた。ここで明らかになったのは、アメリカとの敵対を回避しようという日本政府の姿勢に即した報道が展開されたことである。日本国内に生じた慰問や寄付の運動を積極的に報じ、新聞社自体が主導していたほか、アメリカの動向に常に注意を払い、アメリカ内の対日世論が冷静であることを強調していた。これは、アメリカ内の実情に齟齬する報道であったが、日米の感情的摩擦が激化することを抑制しようとする報道姿勢を垣間見せていた。

以上、南京陥落前後において、支那事変をめぐる日支両国以外の国の関与に注目し、特に支那支援国と目されたイギリスとソ連の思惑を読み解こうとするメディアの姿勢を明らかにするとともに、艦船誤爆事件をめぐる新聞各社の日米関係緩和への尽力を示した。

V 結 語

以上、支那事変における南京陥落をめぐるマスメディアの反応を明らかにした。

第Ⅱ章では、南京陥落後の祝賀ムードに関する新聞報道の特徴を分析し、南京陥落の報道がもたらした影響を明らかにすることを試みた。

第1節では、新聞報道における盛り上がりを検証した。南京に関する記事数は南京における戦闘の本格化とともに急増した。日本軍の南京城の城門占領に対しては、5紙ともに力を入れて報道していたが、見出しのデザインや紙面構成から判断するに『東朝』『大朝』の関心の高さは群を抜いていた

第2節では、日本と支那における南京陥落に対する祝福の盛り上がりの様子を明らかにした。日本においては、南京陥落前から祝福ムードが始まり、その様子は盛んにマスメディア上で取り上げられた。行政主導の祝賀の催しが全国各地で開催され、学童から学生、社会人さらには囚人までもが歓喜の渦に参加していた。また、こうした盛り上がり様子はクリスマスや年末年始に向けた商戦よりも優先されていたことが指摘されていた。支那においては、上海の邦人街で居留民が南京陥落を祝う様子が報道される一方で、現地の支那人については新政府樹立や新年への祝賀が南京陥落に合わせて報道された。南京陥落という極めて戦争色の強い事象も幅広い層で受け入れられていたことを明らかにした。

第3節では、南京陥落の社会的、文化的影響について論じた。第2節でも述べられたように、株価の変動という観点からも南京陥落以前から、陥落を見越した祝賀ムードが始まっている様子が看取できた。商業的な領域では、南京陥落に紐づけられた広告が陥落以前より新聞紙面上を賑わせており、その業界や南京陥落の利用の仕方は多岐に渡った。こうした広告においても、南京陥落の社会的影響力の大きさを窺わせた。文化的な側面では、漫画、詩歌、短歌など芸能においても、また家庭向けの記事においても南京陥落が色濃く反映されている点が、祝賀ムードは子どもや女性を含む一般大衆にも波及していたことを表している。

第Ⅲ章においては南京に関する報道がどのように変化したのか、また国民政府

内の派閥対立がどのように注目されたのかについて論じた。

第1節では南京陥落前後における「南京」に対する認識の変化を明らかにした。初の南京空襲が行われると、マスメディアはこれを大きく報道し、軍事的重要拠点南京は上海攻略後の次の攻撃目標として注目されるようになる。その後空襲の被害が増大し国民政府が南京遷都について検討を進めると、報道もどこへ遷都されるかに注目が集まり、南京陥落自体についての議論は後退する。遷都が正式に発表されると、南京陥落がいつかといった議論が改めて盛んになり、特に南京陥落は近いとされる予測が多く論じられた。陥落後は、南京陥落によっても東洋平和を目指した支那膺懲の目的は未だ達成されておらず、戦争継続を主張する記事が多かった一方で、東亜の平和のために事変を収束させるべきといった見解も見ることができたがそれは少数であった。

第2節では国民政府の内情をめぐる報道について論じた。まず蒋介石は政権を担いながらも劣勢に立たされている様子が強調された。一方で中国共産党は権力掌握を狙う国民政府を脅かす存在として一定の存在感を有していると観測されていた。昭和13年になると弱体化する国民政府に各派が流入していることが伝えられる。陥落後に新設された中華民国臨時政府については、第一次近衛声明の通り、国民政府の代わりとした時局収束の役割がメディアにおいても求められていた。

第4章では、支那事変に関与のあった列強諸国であるイギリス、ソ連、アメリカの3カ国に関する報道について論じた。

第1節では、南京陥落に関してイギリスの行った支那支援をめぐる報道を分析し、イギリスの支援の目的は支那における自身の権益を守ることであると観測されていたことを裏づけた。イギリスで行われた反日運動が、支那に波及したとも見做されていた。

第2節では、ソ連の行った支那支援に関する報道について分析した。ソ連の支援は戦闘機などの軍事物資や飛行士をはじめとした人材派遣が行われたことが中心に報道が行われており、敵国への支援の様子に神経をとがらせていたメディアの様子が看取された。その一方で、支那に対して共産主義のイデオロギーを広めようとする姿勢も観測されていた。ソ連に対する認識は、南京陥落以後は影響力の低下が予測された蒋介石政権に対して、より明確な対立相手として当時のメディアに認識される。ソ連の支援の目的は、赤化による影響力を強め自国の優位な状況を確認することであると認識されていた。

第3節ではパネー号事件に関してアメリカをめぐる報道を論じた。パネー号事

件に関しては、日本政府の誠意ある対応が強調され、民間においても「国民外交」として慰問や寄付の動きが報じられ、日米親善の意向があったことが観測された。

以上、南京陥落に関する、マスメディアの報道の展開と、南京陥落の影響の波及について論じてきた。支那事変において南京は国民政府の首都として大きな注目を浴びていた。それだけに南京陥落に伴う歓喜の渦はメディアを通じて日本社会全体に波及し、社会的にも文化的にも多大な影響を与えていた。その盛り上がりゆえに生まれた日本軍に対する期待と蔣介石が取るに足らぬ相手だという認識も国民全体へ波及する。こうした陥落後の高揚を受けて、第一次近衛声明に至ったともいえよう。

本稿は紙幅の都合上、『近代日本政治資料²⁷ 南京陥落と日本のマスメディア』より図表及び一部論説を割愛したものです。詳細は本誌をご覧ください。

- 1) 秦郁彦『南京事件—“虐殺の構造”—』（中公新書、昭和61年）。
- 2) 南京陥落以後も蔣政権は地方政権として抗戦を続けるとの記事（吉岡文六「蔣介石独裁の動揺を思ふ」『中央公論』昭和12年12月125-133頁）や、中国問題専門家が南京陥落は蔣政権にとって致命的な打撃ではなかったと論じる記事（藤杖丈夫「抗日戦線の行方」『中央公論』昭和13年1月103-108頁）等があったことが指摘されている。（戸部良一「日本人の日中戦争観—一九三七—一九四一—」〈黄自進、劉建輝、戸部良一編『〈日中戦争〉とは何だったのか：複眼的視点』ミネルヴァ書房、平成29年）。
- 3) 長井暁『メディアと日中戦争—朝日新聞を中心に—』（『史論 第69集』東京女子大学史学研究室編、平成28年）。
- 4) 例えば、「南京より三時間十五分 写真空輸に新記録を樹立した本社、幸風機の弾丸飛行」（『大朝』昭和12年12月17日号外2面）と写真の速報性が自負されていた。
- 5) 『東朝』『東日』は1面が広告面として使用されているため、記事は2面から始まる。各紙は最も目につく場所で、南京城門の占領を報道したといえる。
- 6) 朝刊第2の1面は普通の『東朝』と同じく広告面になっている。
- 7) 「特集朝刊16頁」（『東朝』昭和12年12月13日朝刊1面）。
- 8) 前掲、「特集朝刊16頁」。
- 9) 前掲、「特集朝刊16頁」。
- 10) ●は、文字が潰れていて読めなかった部分である。
- 11) 「朝日新聞クロスサーチ」では、朝刊第1の8面、朝刊第2の1面、5面、7面に広告面が掲載されていることが確認できた。両朝刊ともに8頁での構成である。
- 12) 横山大観画伯（『東朝』昭和12年12月13日朝刊1面）。

- 13) データベース上では、「敵首都南京陥落」という文字が薄くなっている。
- 14) 「昨夜第二夕刊発行」(『大朝』昭和12年12月13日朝刊1面)。
- 15) 「陥落した首都南京城東南角を望む」(『東朝』昭和12年12月11日朝刊1面)。
- 16) 「我が軍突入の南京東南部の城壁」(『東日』昭和12年12月11日朝刊2面)。
- 17) 「我が軍の手に帰した南京城内」(『読売』昭和12年12月11日朝刊1面)。
- 18) 「殊勲一番乗り 脇坂部隊」(『東日』昭和12年12月11日朝刊2面)。
- 19) 「南京城頭燦たり日章旗／感激の十日、首都を占領 光華門、脇坂部隊誉の一番乗り 全線一斉に突入市街戦展開」(『読売』昭和12年12月11日朝刊1面)。
- 20) 「薄暮、各城門を占領 死物狂いの残敵掃蕩 燦然・感激の日章旗！」(『大毎』昭和12年12月11日朝刊1面)。
- 21) 「満都を覆う祝勝の光芒」(『東朝』昭和12年12月12日朝刊11面)。
- 22) 「“陥落公表”を待ち、祝賀の大行進 昼夜・歓喜の垣塙へ」(『東朝』昭和12年12月11日朝刊6面)。
- 23) 「各地歓喜に満つ／横浜／埼玉／千葉／甲府／水戸／静岡／群馬／栃木／仙台／長野／新潟／福島／山形／秋田／岩手／青森／札幌／大阪／京都／神戸」(『東朝』昭和12年12月11日朝刊3面)。
- 24) 「来たぞ！学国欣舞の快報 燦たり・敵都占領の歴史的な大戦捷」(『大朝』昭和12年12月10日第二夕刊2面)。
- 25) 「帝大生の祝勝行進 全学挙げて時局認識を高調 宮城遥拝、九段英霊に額く」(『読売』昭和12年12月16日夕刊1面)。
- 26) 「天声人語」(『大朝』昭和13年1月5日朝刊2面)。
- 27) 「見よ！この祝勝待機の大群 南京陥落公報待焦れて抑えきれぬ感謝感激／早くも祝勝群」(『大毎』昭和12年12月11日朝刊13面)。
- 28) 「商都再び灯の海 南京入城式の夜を彩る 歓呼の提灯行列」(『大毎』昭和12年12月18日朝刊13面)。
- 29) 「さあ祝陥落の氾濫だ／繰出す行列 押すな押すなの計画」(『大朝』昭和12年12月11日朝刊7面)。
- 30) 「“空のサーカス団”乱舞 天地・祝勝に揺ぐ 街には1000人音楽行進／蜿蜒5町の音波」(『東朝』昭和12年12月12日夕刊2面)。
- 31) 「万歳と感激の嵐 超満員の日比谷“戦勝の夕”」(『東日』昭和12年12月13日朝刊11面)。
- 32) 「世紀の大勝・爆発する歓喜 敵都南京陥落！感激の第一報／わっ！南京陥落だ！ 万歳に揺らぐ夜の大都 部隊も街も号外に沸き返るその夜忽ち祝賀調高潮」(『大朝』昭和12年12月11日朝刊15面)。
- 33) 「大戦捷の歓喜・爆発一歩前！／落ちろ南京・準備はOK 師走蹴飛ばす祝捷陣大売出しの飾り忽ち模様替 国を挙げて快報を待機」(『大朝』昭和12年12月7日朝刊11面)。
- 34) 「輝くその夜」(『大朝』昭和12年12月11日朝刊7面)。
- 35) 「日本ナイト 上海邦人街でも祝賀」(『東日』昭和12年12月14日夕刊2面)、「上

- 海天津勇士の姿も颯爽 湧きかえる南京陥落の喜び (『大毎』昭和12年12月15日朝刊11面)、「上海の大歓呼」(『読売』昭和12年12月14日夕刊2面)。
- 36) 「ジャケツも着ず張り切って汗の働き 北京へ先陣の愛国少年」(『大毎』昭和13年1月8日朝刊7面)。
- 37) 「南京陥落見越し 株式大躍進 四月以来の高値現出」(『東日』昭和12年12月2日朝刊4面)。
- 38) 「株式一斉に暴騰 南京陥落切迫を反映〈表〉」(『東朝』昭和12年12月7日朝刊4面)。
- 39) 「合財袋」(『大毎』昭和12年12月7日朝刊9面)。
- 40) 「株式／産業景気を待望 平和株の活躍 買目標は拡大す」(『大朝』昭和12年12月2日朝刊4面)。
- 41) 「株式／雑観」(『大朝』昭和12年12月1日夕刊4面)。
- 42) 「夕刊後に市況」(『大朝』昭和12年12月7日朝刊9面)。
- 43) 「株式／新甫は順軌に発会 諸株一斉に躍進 新東新高値へ」(『大朝』昭和12年12月1日夕刊4面)。
- 44) 前掲、「株式／新甫は順軌に発会 諸株一斉に躍進 新東新高値へ」。
- 45) 「夕刊後の市況／株式」(『東日』昭和12年12月8日朝刊9面)。
- 46) 「株式／買気盛返し再び躍進 鐘紡七十円台」(『東日』昭和12年12月4日夕刊4面)。
- 47) 「株式／平和株を中心に年末の大飛躍 後場は利喰に転落」(『大朝』昭和12年12月3日夕刊4面)。
- 48) 「株式／買気再沸騰 新東大爆発 昭和九年来の高値」(『東日』昭和12年12月7日朝刊4面)。
- 49) 「株式／軟派売進みようやく反楽 南京陥落相場一巡／かぶと帳」(『東日』昭和12年12月13日朝刊4面)。
- 50) 「特集月曜経済 株高はまだ続くか？」(『読売』昭和12年12月13日朝刊3面)。
- 51) 「今週の株式／日産買い 穏健なる地相場」(『東朝』昭和12年12月18日夕刊8面)。
- 52) 「株式／新情勢を待望 一斉に反落す」(『大毎』昭和12年12月13日夕刊4面)。
- 53) 「株式／新政権を好感 全般に引き返す」(『大毎』昭和12年12月14日夕刊4面)。
- 54) 「月桂冠」(『大朝』昭和12年12月15日夕刊3面)。
- 55) 「寶ウイスキー」(『東日』昭和12年12月17日朝刊正午版2面)。
- 56) 「松竹梅」(『大朝』昭和12年12月19日朝刊14面)。
- 57) 「酒の司 大関」(『東日』昭和12年12月13日朝刊9面)。
- 58) 「森永ミルクキャラメル 南京陥落 皇軍万歳」(『東朝』昭和12年12月11日夕刊5面)。
- 59) 前掲、「森永ミルクキャラメル 南京陥落 皇軍万歳」。
- 60) 「栄養菓子 グリコ」(『大朝』昭和12年12月13日朝刊6面)。
- 61) 「祝南京陥落 にきびとり美顔水」(『東朝』昭和12年12月13日朝刊9面)。
- 62) 「仁丹で病魔も陥落」(『大朝』昭和12年12月12日朝刊12面)。

- 63) 「ビクターレコード」(『東朝』昭和12年12月12日夕刊2面)。
- 64) 「叫べ万歳」(『大朝』昭和12年12月17日朝刊7面)。
- 65) 「コロムビア大衆盤 リーガルレコード」(『東朝』昭和12年12月20日夕刊3面)。
- 66) 「テイチク愛国レコード」(『大毎』昭和12年12月8日夕刊3面)。
- 67) 「七歐無線」(『東日』昭和12年12月19日朝刊10面)。
- 68) 「ラジオ／銃後歓喜の中に送る 感激の豪華番組 南京陥落祝賀放送／謡曲「田村」梅若万三郎出演／歌謡曲 勝太郎出演／長唄 綱館／合唱と管絃楽」(『東朝』昭和12年12月14日朝刊10面)。
- 69) 「ラジオ／傷病将士を慰問 特輯番組／俚謡連曲“祈る民草” 慰霊の管絃楽／琵琶“那須与一”／歌謡曲」(『東朝』昭和12年12月18日朝刊10面)。
- 70) 「“南京にあがる凱歌” 今週の国民歌謡」(『東朝』昭和12年12月13日朝刊6面)。
- 71) 「南京陥落の後に来るもの 時事解説」(『東日』昭和12年12月10日朝刊7面)。
- 72) 「ラジオも勝関 市の職員七千人や銀行鯛 大都縫う灯の流れ」(『大朝』昭和12年12月15日朝刊7面)。
- 73) 「ラジオ社会面 白衣に聴く大戦歌 病床に万歳を叫んで陥落を悦ぶ勇士たち」(『大朝』昭和12年12月15日朝刊9面)。
- 74) 「こどもの時間 ラジオ訪問／可愛い慰問 東京第一陸軍病院へ」(『東日』昭和12年12月19日朝刊7面)。
- 75) 「祝南京陥落／福助足袋」(『大朝』昭和12年12月15日朝刊6面)。
- 76) 佐次たかし「漫画大レビュー／ター坊の慰問袋」(『キング』昭和12年9月号43頁)。
- 77) 「支那爆弾三勇士」(『少女倶楽部』昭和12年10月号32頁)。
- 78) 「4コマ漫画」(『少女倶楽部』昭和12年10月号8頁)。
- 79) 「漫画天国」(『キング』昭和12年12月号604頁)。
- 80) 横山隆一「連載マンガ 末ッ子ゴロチヤン」(『東朝』昭和12年12月10日朝刊6面)。
- 81) 島田啓三「連載マンガ 半ちゃん豆日記 (110) 祝南京陥落」(『東日』昭和12年12月13日朝刊4面)。
- 82) 木村きよし「鉄兜のテツちゃん 96」(『大朝』昭和12年12月15日朝刊4面)。
- 83) 島田啓三「連載マンガ 半ちゃん豆日記 (112) 祝南京陥落」(『東日』昭和12年12月15日朝刊4面)。
- 84) 中河幹子「南京陥落」(『読売』昭和12年12月15日第1夕刊4面)。
- 85) 佐々木信綱「南京陥落す」(『東朝』昭和12年12月12日朝刊7面)。
- 86) 入江來布「祝敵首都陥落」(『大朝』昭和12年12月14日朝刊4面)。
- 87) 萩原朔太郎「南京陥落の日に」(『東朝』昭和12年12月13日朝刊7面)。
- 88) 室積徂春「祝南京陥落」(『東日』昭和12年12月13日朝刊2面)。
- 89) 西條八十「南京の日の丸」(『東朝』昭和12年12月18日夕刊1面)。
- 90) 土井晩翠「南京陥落」(『東日』昭和12年12月11日朝刊2面)及び(『大毎』昭和12年12月11日朝刊2面)。

- 91) 東城照雄「支那事変替え歌」(『キング』昭和13年3月号312頁)。
- 92) 不明「滑稽替え歌」(『キング』昭和13年2月号326-327頁)。
- 93) 「“南京にあがる凱歌” 今週の国民歌謡」(『東朝』昭和12年12月13日朝刊6面)、「今週の国民歌謡 南京に上がる凱歌」(『大朝』昭和12年12月13日朝刊9面)、「今週の国民歌謡『南京にあがる凱歌』」(『東日』昭和12年12月13日朝刊7面)。
- 94) 松島慶三「南京爆撃の歌」(『少女倶楽部』昭和12年10月号200頁)。
- 95) 「俗曲を唄ふ」(『読売』昭和12年12月4日朝刊10面)。
- 96) 「読者文藝『短歌』／『日章旗』茅野雅子選」(『婦人倶楽部』昭和13年1月号410頁)。
- 97) 「我海軍機長驅南京へ 空軍根拠地を爆撃す 敵に甚大な被害を与ふ」(『東朝』昭和12年8月15日号外8面)。
- 98) 「重慶に遷都準備」(『東朝』昭和12年8月25日朝刊2面)。
- 99) 「人なき死都」(『東朝』昭和12年9月20日夕刊2面)。
- 100) 「天声人語」(『大朝』昭和12年11月11日朝刊2面)。
- 101) 「南京空襲後の後を見る」(『東日』昭和12年10月11日朝刊2面)。
- 102) 「南京は大混乱／蜿蜒続く避難者群 絶望的パニック状態」(『東朝』昭和12年11月18日朝刊2面)。
- 103) 「戦局ニュース／蔣南京市中を巡行」(『東朝』昭和12年11月24日朝刊2面)。
- 104) 「週間戦局／首都攻略線完し 目覚しき我湖沼作戦」(『東朝』昭和12年11月28日朝刊2面)。
- 105) 「週間外交／英・対支策に愈焦慮 新政権動向注視さる」(『東朝』昭和12年12月13日朝刊3面)。
- 106) 「国民政府を相手とせず新政権と提携国交調整 帝国政府対支方針声明」(『東日』昭和13年1月16日号外1面)。
- 107) 田村幸策「時局に対処すべき三大急務」(『外交時報』昭和13年1月15日4,5頁)。
- 108) 「漢口に『抗日大同盟』大規模の新兵募集へ 敗残支那の足掻き」(『東日』昭和12年12月14日夕刊1面)。
- 109) 「国民政府実体を喪う 持久戦はこれから! 首相・帝国の態度声明」(『東日』昭和12年12月18日夕刊1面)。
- 110) 「南京陥落」(『東日』昭和12年12月19日朝刊5面)。
- 111) 「自然科学の分野における日支の提携(一)」(『東日』昭和13年1月20日夕刊3面)。
- 112) 支那事変を対象としたメディア分析としては、戸部良一が『外交時報』と『中央公論』を用いて日本人の支那事変理解の特徴を明らかにすることを試みており、南京陥落によって日本国内には戦勝気分が横溢したという従来の楽観論が、支那問題専門家を含む当時の言論人の間では支持されていなかったと分析している。黄自進、劉建輝、戸部良一『〈日中戦争〉とは何だったのか：複眼的視点』(ミネルヴァ書房、平成29年)。
- 113) 昭和12年(1937年)10月1日-昭和13年(1938年)1月31日。

- 114) 「下野か共産派弾圧か 敗蔣閥々機会を狙う 武力では西南派に劣る」(『大朝』昭和12年11月19日朝刊1面)。
- 115) 「蔣介石、南京脱出説」(『東朝』昭和12年10月24日朝刊2面)。
- 116) 「蔣介石避難？」(『大毎』昭和12年10月24日朝刊1面)。
- 117) 「支那財政飢饉 トピック解剖」(『東日』昭和12年11月11日朝刊3面)。
- 118) 「一芝居打つか 共産党との絶縁 遷都はまさに好機械」(『大朝』昭和12年11月19日朝刊1面)。
- 119) 下条雄三「『ソヴィエト支那』への動き」(『改造』昭和12年10月号)。
- 120) 馬場恒吾「事変下の議会」(『改造』昭和12年10月号)。
- 121) 「共産主義化に支那財界戦く」(『大朝』昭和12年10月4日朝刊5面)。
- 122) 「支那の影武者共産党 抗日利用、蔣政権会食 次の支配勢力を狙ふ スターリン派の大敵“ト派”」(『東日』昭和12年10月30日朝刊3面)。
- 123) 「赤化へ一途の支那 英米黙視得るや 政権掌握に躍起の共産派」(『読売』昭和12年10月31日朝刊1面)。
- 124) 「虎視眈々たる共産党 軍権乗取を目論む 南京政府今や崩壊の前夜」(『読売』昭和12年11月13日朝刊3面)。
- 125) 「停戦反対の馮一派 “反蔣” 行動決行か 南京政府爆発の前夜」(『東朝』昭和12年11月19日朝刊2面)。
- 126) 「遷都と分裂の足搔き」(『東朝』昭和12年11月20日朝刊3面)。
- 127) 「陥落は後退のみ 蔣介石なほ豪語」(『東朝』昭和12年12月14日夕刊1面)。
- 128) 「国民政府実体を喪う 持久戦はこれから！ 首相・帝国の態度声明」(『東朝』昭和12年12月14日夕刊1面)。
- 129) 「新しき東亜確立へ 全国策も歴史的転換 南京落城とともに帝国の使命彌重し」(『大朝』昭和12年12月14日朝刊2面)。
- 130) 「北支新政権の生成」(『東朝』昭和12年12月15日朝刊3面)。
- 131) 「軍隊に戦意なし 強がる反面に悲劇」(『東朝』昭和12年12月21日朝刊2面)。
- 132) 「蔣・西南派の暗闘 表面化の危機 蔣の作戦失敗を責む」(『東朝』昭和12年12月27日夕刊1面)。
- 133) 「日支関係新段階へ／歪曲された印象一掃 蔣政権へ痛烈な裁断 抗日推進力をも爆撃」(『大毎』昭和13年1月17日朝刊1面)。
- 134) 「蔣、長沙に移る 露と結び飽く迄抗戦」(『大毎』昭和12年12月16日朝刊1面)。
- 135) 「国共合作を強化 蔣・軍事政治の改組へ」(『東朝』昭和12年12月19日夕刊2面)。
- 136) 「軍・政両機構の大改組 共産党果然蔣に迫る 国府と相克いよいよ深刻化」(『読売』昭和12年12月22日朝刊1面)。
- 137) 「窮余ゲリラ戦を決意 蔣、軍の大改組に着手 共産軍首脳が作戦指揮」(『読売』昭和12年12月25日第一夕刊1面)。
- 138) 「岐路の抗日支那 “蔣の覚醒は望みなし 新政権誕生を支持せよ”」(『大朝』昭和13年1月14日朝刊1面)。

- 139) 「支那事変に対する世界輿論の動向／南京遂に陥落す」(『世界知識』昭和13年特別号208-210頁)。
- 140) 「天声人語」(『大朝』昭和12年12月7日朝刊2面)。
- 141) 安藤克夫「温情期の北支政権」(『改造』昭和12年11月号7-13頁)。
- 142) 「風塵録」(『読売』昭和12年10月2日朝刊1面)。
- 143) 「政府系四銀行上海引き揚げ 英国の反対で取止め」(『大毎』昭和12年10月4日朝刊2面)。
- 144) 「社説／虫のよい局部中立案 南京政権悲鳴をあぐ」(『東日』昭和12年11月3日朝刊3面)。
- 145) 「敵の作戦拠点は南市 拳に処置の外なし」(『大毎』昭和12年11月3日朝刊1面)。
- 146) 「喘ぐ支那財政 軍費調達難に直面」(『東朝』昭和12年11月15日朝刊2面)。
- 147) 「敗戦に喘ぐ支那財政／心臓部を喪失し 一路、崩潰を続く」(『大朝』昭和12年11月15日朝刊9面)。
- 148) 「飽く迄英に縋る」(『東朝』昭和12年11月18日朝刊2面)。
- 149) 「蔣に代わる人物／英国早くも物色か」(『大朝』昭和12年11月18日夕刊1面)。
- 150) 「南京陥落・世界に波紋／英の勢力完全に失墜 新政権に不安の焦慮」(『東朝』昭和12年12月11日朝刊2面)。
- 151) 「英・極東への増刊 サンデー・タイムス紙力説す」(『東日』昭和12年12月20日朝刊1面)。
- 152) 前掲、「歪む「板挟み外交」 世論の硬化と日本の強硬／英国から見た支那事変」。
- 153) 「打続く敗戦に影薄き支那幣制 信用されぬ“孔声明”」(『大朝』昭和13年1月24日朝刊9面)。
- 154) 「反日運動阻止要望」(『東朝』昭和12年10月10日朝刊3面)。
- 155) 「支那を動かすサッスーン財閥」(『国際知識及評論』昭和13年1月号69-75頁)。
- 156) 「週刊外交／防共陣営の強化に老獮の英・焦躁気味 南京没落の渦紋甚大」(『東朝』昭和12年11月21日朝刊3面)。
- 157) 「蔣、最後の関頭に立つ注目さるる英国の動向」(『読売』昭和12年11月18日朝刊1面)。
- 158) 「欧州危機の経済的背景」(『中央公論』昭和13年2月号5頁)。
- 159) 「ソ連の援助、露骨」(『東朝』昭和12年10月28日夕刊1面)。
- 160) 「ソ連極東軍増強 南京陥落で一層拍車」(『東日』昭和12年12月19日朝刊2面)。
- 161) 新聞内ではE十六戦闘機やN十六戦闘機と表記されているが、本資料集では正式名称を用いる。
- 162) 「再建の敵空軍へ痛棒 逃ぐるを追捲る 壮烈・未曾有の空中戦」(『大朝』昭和12年12月3日朝刊1面)。
- 163) 「現れたり“空の外人数隊” 米国・ソ連から続々、ルンペン鳥人群 契約済みは前線出動=21日朝刊11面に訂正」(『東朝』昭和12年10月17日朝刊11面)。
- 164) 「ソ連重撃機漢口へ到着／敵空軍内訌」(『大朝』昭和12年12月2日朝刊1面)。

- 165) 「支那事変情報／2. 外国の動向」(『偕行社記事』昭和12年11月10頁)。
- 166) 「ソ連参謀、士官派遣 抗日を援助 対支密約進行説」(『東日』昭和12年12月15日夕刊1面)。
- 167) 「ソ連顧問を相手に抗日軍再編狂奔 迷夢覚めぬ蒋介石」(『東日』昭和12年12月19日朝刊2面)。
- 168) 吉岡文六「蒋介石の運命を相す」(『日本評論』昭和12年11月1日号133-134頁)。
- 169) 「他国の干渉排除 川崎氏事変原因を衝く」(『東日』昭和13年1月22日夕刊1面)。
- 170) 「日ソ関係の急迫と空襲下の婦人の覚悟座談会」(『婦人倶楽部』昭和12年11月198-211頁)。
- 171) 吉岡文六「蒋介石は赤化せず」(『改造』昭和12年11月号240-244頁)。
- 172) 前掲、「ソ連新大使漢口着 対支援助愈よ積極化 交換条件に国府赤化要求」。
- 173) 「支那財界安堵 敗戦を忘れて」(『東朝』昭和12年12月11日朝刊2面)。
- 174) 「支那・抗日へ盲進 独大使も見限る 内部七花八裂は必至」(『東朝』昭和12年12月11日朝刊2面)。
- 175) 「性懲り亡き露国 なおも対支援助 条件は共産軍首脳の起用」(『大毎』昭和12年12月17日朝刊2面)。
- 176) 馬場秀夫「南京政府崩壊後に来るもの／ソ連はどう出るか」(『世界知識』昭和12年11月29-31頁)。
- 177) 「赤化へ一途の中国 英米黙視し得るや 政権掌握に躍起の共産派」(『読売』昭和12年10月31日朝刊1面)。
- 178) 平竹傳三「敵か味方か? ソ連⇔支那」(『世界知識』昭和13年1月35-37頁)。
- 179) 「南京陥落=各国の反響／徹頭徹尾見透し誤る ソ連 国内混乱に拍車」(『東朝』昭和12年12月11日夕刊4面)。
- 180) 「我空軍の敗敵爆撃 米艦船に奇禍 長谷川長官措置講究」(『東日』昭和12年12月13日夕刊1面)。
- 181) 「米艦不祥事件に誠意もて善処 海軍次官談を発表」(『東朝』昭和12年12月13日号外2面)。
- 182) 「英米艦船砲、爆撃事件 過誤に基く“不幸” 我が海軍当局経過発表」(『東日』昭和12年12月15日朝刊2面)。
- 183) 「パ号」とは「パネー号」のことである。また、「フ号」とは「フーヴァー号」のことである。日本海軍は同月11日、座礁したフーヴァー号の救助作業にあたった。
- 184) 「近事片々」(『東日』昭和12年12月17日夕刊1面)。
- 185) 「外相・米大使を訪問 遺憾の意を表明 パネー号爆沈事件」(『東朝』昭和12年12月14日朝刊3面)。
- 186) 「責任者を適切処置 損害に対し補償 英米軍艦不祥事件 外務省の発表」(『東朝』昭和12年12月15日朝刊2面)。
- 187) 「我が軍艦現場へ 遭難者救助に努む」(『東朝』昭和12年12月14日朝刊3面)。

- 188) 「パネー号のお詫 優しい大和撫子 文化学院生 米大使館へ」(『東朝』昭和12年12月15日夕刊2面)。
- 189) 「三角点／パネー号代艦」(『東日』昭和12年12月15日朝刊3面)。
- 190) 「高石使節・米紙社長懇談 我国民の熱意諒解 本紙の「三角点」を訳載 パネー号事件」(『東日』昭和12年12月16日夕刊1面)。
- 191) 「米紙に反映する三角点」(『東日』昭和12年12月17日夕刊2面)。
- 192) 「わが陳謝で輿論平静へ」(『東日』昭和12年12月15日朝刊2面)。
- 193) 「平和的解決に努力 ル大統領所信を表明す」(『読売』昭和12年12月19日第1夕刊1面)。
- 194) 「近事片々」(『東日』昭和12年12月15日夕刊1面)。
- 195) 「余録」(『東日』昭和12年12月16日朝刊2面)。
- 196) 「社説／日満解決を期待す」(『東日』昭和12年12月16日朝刊3面)。

玉井研究会 (50音順)

石川 隼大	岩崎 一貴	榎本 晴日	大栗 拓也
川合 悠乃	癸生川朋也	篠崎 翔太	西川 桃加
吉中 周			